

---

# 最強のNPC共（仮）

アリス法式

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強のNPC共（仮）

### 【Nコード】

N6833Y

### 【作者名】

アリス法式

### 【あらすじ】

俺は、勇者で『導き手』で、転生者だ。

なあ女神様、俺チョット背負っているもの多すぎないか。

この上、『三千年後』の世界と魔王な妹も背負えって言うのか。

しかも、双子なせいで俺（勇者）と妹（魔王）の『存在』が混ざり合ってしまったとか。

この腐れ女神が、俺にどうしろっていうんだ。

といった感じで勇者と魔王の兄妹が世界を救ったりしたりしなかったりするお話です。

あらすじは、悲壮な感じですが、案外子供の身体を満喫している最近の勇者（兄）なのであります。

現在二章終了、外伝編を投稿中です。

## 勇者と魔王（前書き）

一話一話短めにのんびり更新。

## 勇者と魔王

「くははははは、そのていどかのう、勇者よ」

何枚も張り巡らされた結界魔法の中心でいかにも魔王、といった姿をした化け物が妙に高い声で高笑いをつづけていた、勇者と呼ばれた少年はボロボロの体でありながら、瀕死状態のなかまをかばうように魔王の前に立ちふさがっている、

「なんじゃ、すでに返事をする気力まで失ってしまったようじゃのう」

「う、うるさい、魔王」

なんとか、声を絞り出したがそれが最後の力であったようで、勇者はそのまま地面に倒れ伏した、

「くそ、ここまでか、だが、覚えておけ魔王、僕が倒れても第二、第三の勇者が…」

「勇者よ、それは、魔王のセリフじゃ」

「……………」

呆れたように言う魔王に対して、勇者は少し迷ってから言葉を続ける、

「たとえば、この身、何度たおれようとも、我が命、我が魂が朽ち果

てるまで神々の力で何度でも蘇り貴様の前に立ちふさがるだろう」

「それで、高笑いしたら、完全に魔王じゃな…、しかも、戦い方が蘇生頼みとは、魔王どころか、それ、もうゾンビじゃろ…」

「……………」

――――  
勇者視点

くそ、何なんだこの魔王ってやつは、エンカウントしたと思ったら、速攻で僧侶（女）と、魔法使い（女）と戦士（女）をムチャクチャチートくさい、魔法で葬りさったくせに、僕に対しては、ねちねちと死ねない程度のダメージでいたぶってくる…

とっ、思えば面白そうに僕のセリフに対していちいち、ツツコミを入れてくるし、よくわからん？

だかな、魔王お前の遊びのおかげで最後の一撃を撃つための時間稼ぎはできた。

いくぞ一か八かの

「我放つ聖光の一撃」 《セイクリッド・ブラスト》

――――

## 魔王視点

ふふふ、ほんとに飽きさせない奴じゃ、女三人連れて現れたときは、生き返ることが、できぬくらいまでバラバラにしてやろうと思いましたが、ていうかどうということじゃ連れている仲間がまえと違うとか、これなら、まえの戦士（男）三人連れた何がしたいのかよくわからんパーティーの方が遙かに増しじゃ：

て、そんな、話じゃなくてのー、ん、勇者が何かやろうとしてるのー、どれ、少し反撃してやるかの：

「我穿つ漆黒の三つ又魔槍」（ブラッド・ジャベリン）

――――

勇者の身体を何十本の魔槍が貫く、それでも、勇者は口元に笑みをうかべていた。

「魔王、油断したな…」

魔王の身体を一条の光が貫き通していた、闇雲にに放ったはずの一撃は、魔王の結界ともに、奇しくも魔王の核を撃ち抜いていた、

「クッククッ、久しぶりだよ勇者、何千年ぶりかのう、これが死ぬ感覚というやつだったかのう」

どこかうれしそうに声色を発しながら、徐々に魔王の身体が虚空に消えて行く、

勇者も限界なのか、色の無い瞳で虚空をにらむ、

「さようならだ、魔王、二度と出会わない事を願っているよ」

「つれないのう、お主が居なければこんな世界、詰まらぬではないか…」

「僕は、もうごめんだ…終わることの無い、この不毛な戦いも…お前のその見慣れた面を拝むのも…」

「見慣れた面…、おお、そうか、そうじゃのう、長き、遊びに付き合ってもらった礼もあるしのう」

何か納得したように、魔王がうなずくと、それっ、っと一声発してその頭にかぶっていたらし化け物の顔の仮面をはずす、その下には、

「なっ、お…おんな！」

「またのう勇者、輪廻の果てで合おうぞ、いつまでも続く終わり無き時の果てでのう…」

そう、一声かけると魔王は、ゆっくりと虚空にきえさった。勇者の驚いた顔がさぞ可笑しかったのか、その口元に微笑を浮かべながら。





## 勇者と魔王（後書き）

今回は、書き溜めていたので投下します。  
転生物のぞくに言う一章ですね。

**転生者 勇者（前書き）**

二話目です。

## 転生者 勇者

薄っすらとしていた光が瞬きを繰り返すごとに、段々ハッキリしてくる。

またか、何度転生を繰り返しても、あの腐れ女神と顔をあわせるのだけは、憂鬱だ。

「お帰りなさい、今宵の旅はいかがでしたか、『導き手』殿」

目の前には、BL小説を片手に、女神様が紅茶を飲んでいた。

「ただいま戻りました、女神様。今回は、魔王を倒せたものの、私も命を失ってしまいました」

何時もの事なので、特に気にせず返事を返す、

「そう、お疲れ様。それで『導き手』殿、次はどこに行きたいですか？」

手元から少しも目線を話す様子が無いまま、少し頬を染めている女神様が聞いてくる。

「どこでもかまいません、女神様の御心のままに。と、言いたいところですが。一つだけお願いが、魔王のいないところでお願いします」

正直行く場所はどこでもよかった、とりあえずこの腐れ女神様とあの魔王から離れられるなら・・・

「魔王、ああ、『秩序』<sup>魔王</sup>のことですか。つまり、魔王である彼女がいなければどこでも良いと、言うことですね」

BL小説を凝視したまま、返事をする女神様、てか、このお方さっきから一度も瞬きしていない、魔物よりよっぽど怖かった。

「ええ、どこでもかまいません」

ちなみに、今まで繰り返してきた転生の中で、魔王の性別を知ったのは始めてだ。

というか、なんども会っているのに、魔王に性別があると知ったこと事態が初めてだ。

いつもいつも、化け物の皮なのか、幻影魔法の一種なのかよくわからないが、典型的な『魔王』然とした格好をしていたため気にしたことすらなかったのだ。

そんな感じで、少しそれてしまってた気がする思考を悶々と続けていた所に、ありえない言葉が降ってきた。

「では、さっきまでいた時間軸から三千年後に転生してください」

では、とは何だろう、確かにどこでも良いと言いはしたが、三千年後だと。

脈絡が無さ過ぎる、てか、一回くらいその手元のBL小説から目を上げろよ、この腐れ女神様が泣くぞこのやろう。

と、戸惑う思考を押さえつけて、とりあえず疑問をぶつけてみることにする。

「三千年後ですか、せめて、その理由だけでも教えていただきたいのですが、この腐れ・・・」

おっと、考えていたことがそのまま口から出そうになった。

「理由ですか、転生の時間を決めるのは、私ではなく『時代』なのですよ、私は『導き手』を必要としている『時代』に、あなたを送っているに過ぎませんから」

腐れ女神様は、まったく顔を上げずに理不尽な言葉を、吐き続ける。

「わかりました、ではそれで納得することにして、三千年後に行つてまいります」

まあ、このくさったお方と問答をしてもしかたがないので、内心の動揺をもみ消して指示に従うことにする。ていうか、この人（人ではない？）は、一度言った言葉をけして曲げないので、反論する意味がまったく無いのだ。

そんな感じの会話を終えて、体をリラックスさせると、ゆっくりと目を閉じていく。

転生のための準備だ、感覚としては、睡眠が一番近いかもしれない。

「では、おやすみなさい『導き手』<sup>勇者</sup>殿、最後の旅に光の加護があらんことを」

薄れいく意識の中で見えたのは、手元から少しだけ目線をはずした女神様だった。

その表情が、少しだけさびしそうに見えたのは、僕の気のせいかもしれないが……。

**転生者 勇者（後書き）**

感想などありましたらよければ。

## 転生者 魔王（前書き）

三話目です。



## 転生者 魔王

わたしが、転生の間に入っていくと、女神様がその手で優しく光り輝く球状の者を抱きしめていた。

「なんで、そこまで大好きなのに、いつも本で顔隠して気の無い不利をするのかねえ、あんたは」

「な、ナンノコトデスカ、知りませんよ」

私は腐った林檎なんですから、とか意味のわからんことをのたまってらっしゃる方の頭を、ひっぱたいて、とりあえず意識を戻すかね。

「おーい、帰ってきんしゃい、この腐れ女神」

「ぶはっ、って腐っても女の子ですよ、顔面はやめてください、顔面は」

腐ってもって、勇者の前ではかっこつけるくせに私のまでとことん繕おうとしないなこのお方は。

「これが、恋ってやつかねえ、甘酸っぱいねい」

「ぶっはー、っここ、鯉、淡水魚には興味ありませんからー」

「ー」  
なんかあせった女神様が、紅茶噴出しながらおろおろしていらっしやる、おお、おもしろい。

て言うのは、置いていてこっからは少々まともな話だね。

「で、女神様、実際問題私たちが『三千年後』に転生するって言うのはなぜなんさね、それにさっきの最後の旅って言うのも気になるさね」

私が、会話を变えたことでようやく落ち着きを取り戻した女神様（腐）、

「で、（腐）てなんですかーーーーー」

「なにに、叫んでんのや」

「うう、世界の不条理にです」

と、腐った小説に顔うずめながら泣きまねしちやるけど、口がにやついてるって、女神様（腐）、

「あなたもですかーーーーー、いえもういいです、これ以上いくと話が進みません  
それで、なぜ『三千年後』かって話ですな」

「そやそや」

「実は、私の力では直接『三千年後』に干渉できないですよ、多分人間たちが何か世界に干渉したんだと思うんですけど  
だから、実際に送るのは、十五年くらい前になると思います」

なるほど、『三千年後』に何かある可能性があるから、それを調べてほしいと、で、実際送られるのはその十五年ほどまえっちゅうこ

とやな、まあ十五年で準備しろってことかいな、なかなか厳しいこと言ってくれるのな。

「十五年か、なかなか、厳しいこと言ってくれるのなあ」

「まあ、初心に戻ったつもりで、楽しんでくるといいですよ」

初心？ちゅうことは、

「なんや、うちら、今までの成長全部パーなんか」

「ええ、まあ、そういうことです、『三千年後』に飛ばすって言うのはそれだけリスクの高いことなんですよ」

「マジかい、それじゃうちだけ二百年待ったりしなくちゃいけないんじゃない．．．」

「それは、大丈夫です『導き手』と『秩序』は対の存在ですから、ちゃんと同じ時空に落ちるようになりますよ」

その言葉にちょっとほっとするわー、正直勇者たんが二百年も来てくれないとかなきそうになるところだったよー、

「それじゃ、最後の話ですね」

いつにも無く、まじめな顔の女神様（腐）、

「もう、いいです．．．」

「何いきなり、いじけてんのや」

胸に抱きしめた勇者の魂にのの字をかくなや、

気をとりなおして、

「それじゃあ、最後の話ですね」

「なんや、さっきから最後最後って、なんかもう二度と会えない見たいやんか」

「ええ、そのまさかですよ」

「な、」

「今までの、数え切れないほどの転生、それに今回の『三千年後』もの月日を越える転生、はっきり言って、お二人の魂はもうこれ以上、転生という輪廻に耐えられる状態ではないのですよ」

な、かなり驚きの報告やね、そうか

「じゃあ、これでお別れなんか」

「ええ、そういうことになりますね」

だから、さっきも勇者の魂抱きしめてないっておったんやな、私らは存在を付加されて、この世界の守り手として女神様に作られたんやから、子供みたいなもんやもんな、

「ふん、湿っぽい話はなしや、ほなうちもいくわ」

「魔王たん、言葉使いがめっちゃくちゃですよ」

「む、わかってるわ」

「ティツシユは持ちましたか、ハンカチは、さびしくない？大丈夫？」

「ああ、もう遠足前のお母さんかって、大じょぶやから、安心して見送らんかい」

そう言って転生陣の上に立つ、ほな、いこか。  
うるうる、瞳に涙を溜めている女神様は見ない見ない。

「それじゃあ、いってくるよ」

「うん、がんばってください・・・」

「いままで、ありがとうな・・・、お母さん」

キューーン、光に包まれながら静かに魂に還っていく。  
さようなら、おかあさん。

しばらく経って、転生の間には、なきながら二人分の魂を抱きしめている女神様がいた。

「さようなら、クレア、サクラ  
きつと、いえ今回こそは、二人とも幸せになるのよ」

やさしく抱きしめた、二人の魂が静かに世界に還っていく。

そこにあるのは、今まで以上の困難だろう、それでも二人には幸せになってほしかった。

たった二人の可愛い子供たちに。

## 転生者 魔王（後書き）

次でとりあえず今回の投下分はおしまいです。

「あら、可愛い赤ちゃんですね」b y女神様(腐)(前書き)

とりあえず転生編最後です。



「あら、可愛い赤ちゃんですね」b y女神様（腐）

そこにあるのは静謐な闇にして、暖かい空間。

俺の意識が戻ったのは一寸前だった。

きつとここは俺の母親に当たる人の、お腹の中なのだろう。

そこまで、理解していきながら子供に戻ってしまったのかと心底後悔する。

だって、あれだぞ、なんていえないんだ、ここ最近はある程度年をとった状態で転生してたからな。

気恥ずかしいというか、魂の年齢的には何千歳経っているかわからない俺だぞ。

と、そこまで考えて、この母体という空間にもう一人、先客がいることを思い出した。

と、言ってもおれは今意識が戻ったという話でずっと一緒にいたのだろうか。

そうだな、この子は、男の子だろうか、女の子だろうか。

きつと俺は遠くない未来に旅に出ることになるだろうが、それまでこの子を大切にしようとなんとなくそう思った。

ん、世界が明るくなった、もしかしたら生まれるのかもしれない。

「おぎゃーーーーーー」

そう思っていたら、自分の口から酸素を求める産声があがった、

あぶねー、正直呼吸できなくて死ぬかと思った。

まあ、俺のことはいい、俺のあとに妹も無事生まれてきたみたいだ。

女の子だ、妹だ、ワッショイ。

そして、妹が産声を上げながら静かに目を開ける、いやーやっぱ俺の妹可愛いな。

そして俺と妹の目が合った瞬間俺は理解した。

確かに意思が宿る、その瞳。

何度も顔を合わせたけど、実際に顔見たのは一度だけ。

それでもわかる理解できてしまう。

俺の妹は、魔王だ。・・・・・・・・・・。

—よろしくお願いします、お兄様。

双子だからなのか、なぜか伝わってきたその言葉

それを聞きながら俺は意識を失った。

「あら、可愛い赤ちゃんですね」b y女神様(腐) (後書き)

正直何歳からはじめるか悩んでいます。がぼちぼちがんばります。

誤字脱字感想など書き込んでくれると嬉しいです。

## 最強の妹と最狂の母上（前書き）

悩んだ末、とりあえず三歳から

理由は、自分も物心がついたのがこのくらいだったかなー  
とかそんな単純な理由です

## 最強の妹と最狂の母上

—なあ、妹よ

—はい、どうしました、お兄様

—どうして、お前は魔王なんだ

—とても哲学的な命題ですね、お兄様

—そんな大層なもんじゃねー！！！！！！！！

これが、俺と妹の最初の兄弟げんかでした。

あれから、三年くらい月日は流れただろうか、今でも俺は妹に勝つことができないみたいだ。

「なあ、サクラ」

「どうしたの、クレアお兄ちゃん」

「どうして、お前は魔王なんだ」

「お兄ちゃんだって、魔王じゃない」

というわけだ、どこで狂ったのか、はたまた双子として血がつながってしまったためか。

俺は、勇者にして魔王という奇妙な存在に成り果てている。

具体的に、言えば、もともと金髪で蒼の瞳だったおれは、金髪の前

髪の部分に黒のメッシュが入っており、目は蒼の瞳と金の瞳のオッドアイになっているし、サクラは綺麗な黒髪で前髪に金のメッシュ、俺とは左右対称のオッドアイをもっている。

正直に言おう、黒髪のオッドアイ、しかも金のメッシュを丁寧に三つ編みに結い上げた今、目の前で小首をかしげている少女は、正直めちやくちや可愛かった。

仮面をつけていた魔王時代ならともかく、俺はこの凶悪な可愛さを持つ妹魔王に二度と勝てないという自身がある。

しかも三歳だぞこの美貌でゴスロリドル見たいな格好して、小首を傾げてみる。

お兄ちゃん、悶絶死するわ。

念話でしか、意思疎通ができなかったころこそがんばったが、もう無理です。

お兄ちゃん、この子がいないと生きていけません。

は、今の笑顔はそこまで考えてのことかなんと言う策士、お兄ちゃん子のこの将来が心配です。

「どうしたの、クレアお兄ちゃん」

「サクラ」

「はい」

「お母様の、足音がする」

ドバーーーン、毎度毎度、家が壊れるんじゃないか、というレベルの音を立てて、母親が外に飛び出してきた。

「クレアーーーーー、サクラーーーーー、お母さんを置いてどこにいつてしまったのーーーー、」

そして、絶叫、ここが閑静な森の中にある自宅じゃなければ、近所から苦情がきそうなほどのおんりょうである。

「おかあさん、ここにいますです」

クスッと、クレアが人懐っこい笑みを浮かべると、俺意外と話すときの年相応の口調になる。

「クレアーーーーー、サクラーーーーー」

母、マリアが、騎士もびっくりのスピードで俺たちの前まで来ると、ひしと俺とサクラを抱きしめて、オンオンなき始めた、こうなるとまだ年相応の体しかもたない俺とサクラには振りほどくこともできず、されるがままになるしかない。

「はうえさま、なきやんでください、お、ぼくとサクラは、ははうえさまがねているあいだに、おはなのかんむりをつくって、おどろかせようとしただけなんです」

「クレア、サクラ」

もしもの、ために考えておいた言い訳を俺たちを抱きしめて泣きじやくっている母親に打ち明ける、母も嬉しそうに泣き顔を笑みの形に変えながら。

「おきて、二人がいないことのほうが驚いたわ、この馬鹿息子」



罵倒してきた、ええー、今罵倒されるシーンだっけ。

ほめられるとか、そんな感動的な展開は無いですか母上。

実際のところ妹と普通の言葉遣いで話すために、人気の無いところに出てきただけだったので、つかまって家に帰るのに反対はしないのだが、この後、一応作っておいた花の冠を頭につけた母親に小脇に抱えられ家路につく俺たちであった。

「サクラ」

「はい、おかあさん」

「ちなみに、この冠の作り方は誰に教えてもらったの？」

「ドロシーですよ、おかあさま」

正直に、俺達の家のメイドさんの名前を明かすサクラ、

「そう、じゃあドロシーにきつくお説教しとかないとね」

「へ、なぜですかはうえさま」

「あたりまえでしょ、花の冠のせいで可愛いクレアとサクラが家出したのよ!!!!!!」

――家出じゃねーよ！

心の中で同時にツッコんだ俺達を小脇に抱え、今日も優雅独尊な母が行く。

いや、普段はかなりの淑女なんですよ。

俺とサクラのこととなるとキャラ変わるだけで。

そんな、誰に弁明しているのかわからない、俺達を抱えて母は家路に着いたのだった。

ちなみに、予断だ、両手がふさがった母上が扉を蹴破ったのは。

母上、俺とサクラのこととなるとキャラ崩壊するのは、勘弁してくれ。

## 最強の妹と最狂の母上（後書き）

とりあえず、ぼちぼちとやっていきます。

誤字脱字感想などありましたら書き込んで下さると嬉しいです。

更新としましては、基本毎日、祝日、休日などはアクア、とグラビを書いてるので更新しない場合もありますが、基本平日は短いですが一話ずつ落としていきたいと思います、このペースでいつまでいけるかは不明ですが、お付き合いただければなと思っています。

## 魅了する息子とストーキングする父親（前書き）

なんか、サブタイトルがもういろいろ駄目なことになっていますがお気になさらず。

## 魅了する息子とストーキングする父親

—なあ、妹よ

—はい、お兄様

—なぜお前は、【以心伝心】を使っているときと、普段呼ぶときに呼称が違うのだ？

—お兄様、ドロシーたちの前でお兄様と呼んでほしいのですか、ポツそんな台詞と共に頬を染める三歳児と、それを見て身悶える三歳児、そんなあたり前の日常が今日も続いていく。

「それで、サクラ」

「どうしたの、クレアお兄ちゃん」

—クッ、お兄ちゃんも捨てがたい

—お兄様、思考が駄々漏れです

コホン、と心の中で気を取り直して。

「今日は、何をして遊ぼうか」

「かけっこをしますか、それとも、またお花の冠を作りにいきますか」

—いい、模範解答だ妹よ

—お褒めに、預かり光栄ですお兄様

—それで、結局のところどうする

—今現在の、自分達の戦力の分析それは必須事項だと思います

ちなみに、サクラ、魔王の言葉使いに違和感がある方もあると思うので、補足するが。

簡単にいえば、転生によって幼児退行しているのである。

あの、しゃべり方、性格は何年も生きて出来上がったものであり、転生当初、特に子供に転生したときはいつもこんな感じになる。

「そうだね、じゃあ草原に行ってかけっこをしようか」

—そうだな、広場のほうで体力の確認を行おうか

「わかったよ、クレアお兄ちゃん」

—わかりました、お兄様それでは、先に行っていますので

「うん、サクラは先に行っていていいよ、ぼくは、お父様に許可を貰ってくるから」

—サクラは、先に行っていてくれ、俺は扉の陰に隠れた、ストーリーに話をつけてくる

「うん、いってきまーす」

一頼みます、お兄様

扉の影から、サクラが向日葵のような笑顔を浮かべてとてと走り出したことよって、あせって身を隠す気配が伝わってくる。

一まだまだ、甘いな、お父様

俺も、ひとつ苦笑を浮かべると、父親の書斎に向けて走り出した。その途中、隠れている気配のすれすれを通っていくことも忘れない。

一おおー、あせってるあせってる

決して急がずに、走って父親の書斎の扉の前にたどり着くと、俺はノックをして部屋の扉を勝手に開けた。

「しつれいします、おとうさま」

「ああ、よくきたね、クレア」

軽く息を乱しながら、出迎えてくれた父親、見た目は蒼髪でモノクルをかけ魔法使いが好んで黒いローブを身にまとった青年、年齢不詳、は転移魔法らしい魔法の名残を一生懸命隠しながら、俺にさわやかに微笑んだ。

一お父様、体面保つためにそこまでするんですか

もちろん、俺の心の声は父親には届かない。

ちなみに、年齢不詳の某母上様が金髪なのに対して、俺は金に黒のメッシュ、サクラは黒に金のメッシュの髪色のため、一時期、妻が浮気をしていたんじゃないかと悩んだとか。

まあ、今そんなことはどうでもいい、いまは外にいく許可を得ることが先決だ。

「おとうさま、サクラとふたりでおそとにあそびにいきたいのですが、よろしいですか」

なぜか、父親が悶えている、何々、「サクラと一緒にの時の凜々しいしゃべり方もいいが、したったらずもたまらない」だと、お父様、安心してください、あなたと俺は間違いなく親子です。

「ああ、ぼくはかまわないよ、二人で遊んでおいで、でもくれぐれも危険なことをしないようにね」

よっしゃー、言質はとった、後は止めを刺すだけだ。

「うん、ありがとう、パパ」

太陽の様な笑顔に、蒼目のウインク付の感謝の印、

「グハ、イッテラッシャイ」

ちなみに、お父様が片言になっているのは、ウインクして残った金の瞳、「魔王の魔眼」には「魅了」の効果があるからだ、両眼そろっているときよりは、その威力はかなり落ちるらしいが、好意を持つてくれている人間に使う場合はそれでも十分だった。

なぜか吐血しながら身悶えている、父親を置き去りに、俺は外に向かって走り出す。

今日、やることは自分達の今の実力の確認。

それを行えば、これから十二年間の間で自分達がやるべきことが見



えてくるだろう。

そんな期待を込めて俺は走り始めた。

「ふう、我が子ながら、なんて威力だ」

息子が走り去って数分、ようやく、意識を取り戻した父親は、部屋の窓を開けると、静かに詠唱を始める。  
。

「さて、いくか、今日はどんなびっくりすることを拝めるかな」

飛翔魔法、操作性の難しさのみを言えば最上級魔法にも劣らぬ魔法を、子供達のストーリーキングのためだけに発動すると、今日も心配性な父親は空に旅立っていった。

## 魅了する息子とストーキングする父親（後書き）

黄金拍車様わざわざ、誤字のご指摘ありがとうございました。

これからも誤字脱字感想などありましたら書き込んでいただけたら幸いです。

## **混成種&1t;ハイブリッド&gt;t;な俺達（前書き）**

その名のとおり今回は、存在と二人がどんな状態なのか、そんな軽い説明です。

## 混成種&1t;ハイブリッド&gt;t;な俺達

一妹よ

一はい、お兄様

一端的に言おうか

一はい

一俺達は、弱くなってしまったようだ

家から、少し離れた草原の中、俺は、のんびりと座り込むサクラの傍でうなだれていた。

先も言ったとおり、俺達は弱くなっていたからだ、いや、正確にいえば、俺達ではなく、主に俺が。

子供になっているのだから、当たり前だって。

そういう意味ではなく、『存在』として俺は、弱くなっていた。

簡単に言えば、魔王と勇者、血が繋がってしまった結果、俺達は存在が混ざり合ってしまった。

ゆうなら、魔をつかさどるものと聖をつかさどるもののハイブリッドである。

しかし存在として、ハイブリッドが成功するわけは無く、非常に不安定な二人が出来上がってしまったといえるのだった。

まずサクラ、魔王は、魔族の膂力と無尽蔵の魔力を有した上で、聖属性以外の魔法がすべて使える、魔をすべる王、それがもともとの存在である。

今現在のサクラは、俺の聖属性をほとんど吸収し、全属性の魔法を使えることがわかった。なに、最強じゃないかって、はつきり言う、

最弱だ。

まず、本来魔法使いは、一属性しか魔法を持つことができない、ほとんどの魔法使いは、己に与えられた属性を極めていき高みを目指す。

そして、その行き着く先には、ほとんど差異は無いのだ。

たとえば、水の魔法使いなら、水を物理的に操る事で、飛翔することも可能だし、火の魔法使いなら、空気を爆発させる事で、空を飛ぶことができる。

つまり、属性が違えども、そのたどり着ける場所は、己の努力、独創性しだいなのだ。

しかしサクラの場合は、違う、すべての属性を操れるということは、そのすべての属性を極めるのにほかの魔法使いの10倍以上かかるということをする。

全属性が、たどり着ける高みが一緒なため、全属性を使えるメリットはあまり無いのだ。

そして致命的なのが、俺の聖属性を取り込んでしまったせいで、彼女は魔を浄化されてしまっていた。

つまり、今の彼女は魔族より神族、そして神族より限りなく人間に近い存在である。

つまり、魔族の強力な臂力と無尽蔵の魔力というアドバンテージを失ってしまったのだ。

そして一番深刻なのが俺であった。

おれ、勇者じゃなくなっちゃった。

サクラの、魔族の証である魔性を俺の聖属性が打ち消したため、俺の身体には聖属性が少しも残っていない、その上、消しきれなかった魔性が俺の身体を侵食したため、今の俺は、サクラより魔族に近い存在になっていた。

しかも、俺がもともと操れた魔法は聖属性のみ、その聖属性が体から無くなった今。

一俺、魔法使えないじゃん

というわけで、俺は今現在、絶賛うなだれ中です。

一お兄様、気をしっかり持ってください、お兄様には無尽蔵に近い魔力と、勇者を軽く越える膂力があるではないですか、私なんて、火の玉一個で魔力切れの上に、ここまで歩いてくるだけで座り込んでしまうほど体力が無いのですよ

一魔力があっても、それを使える系統魔法が無いんだよ、しかも、力も強すぎて意識すると制御しきれないし

俺のパワーは、勇者であったころとは比べ物にならないほど凶悪になっていた、三歳児がそれを実感してしまうほどに。

日常生活では、支障が無いのだが、いざ、剣の稽古でもしてみようかと木の棒を持った瞬間、俺の手の中でその木の棒は木っ端微塵に砕け散った。

ためしに、広場にあった大岩を思いっきりぶん殴ってみた、簡単に言おう、爆裂した。

三歳児の、パンチで。

俺が、泣きそうになったのは言うまでも無い。

うん、これからどうしようか。

とりあえず、サクラは体力と魔力保有量の訓練、俺はこの有り余る魔力の使い道と、ひどすぎる力の制御だな、まあ、とりあえずは明日からだ。

今日は、もう動きたくない。

—ちなみに、お兄様

—なんだ、妹

—さっきお兄様が、大岩を爆裂させたときに

—ああ、させたときに

—その破片に当たって、お父様らしき物体が上空から落下、そのまま近くの森に突っ込んだのですが、どうでしょうか？

—・・・・・・ほおっておけ

**混成種&1t;ハイブリッド&gt;t;な俺達（後書き）**

投稿時でP V 2756 ユニーク384でした。

皆様、ありがとうございます。

誤字脱字感想がありましたら書き込んでくれたら嬉しいです。



## 書庫に行こう、妹よ（前書き）

タイトルに反して、今回は妹目線です。

まあ、いまのところは感情が希薄なので、あまり楽しいできになっている保障はありませんが。

## 書庫に行こう、妹よ

—お兄様

—ん、どうした妹よ

—どうして、私達はこんなにコソコソとしているのですか

—いい質問だな、妹よ、今からお父様の書庫に忍び込むからさ

—どうしてですか、魔法の技術と知識なら私達は十分持っていると  
思いますが

—知識が偏りすぎていると思うんだよ、俺達は転生する前からこの  
三千年間なにがあったのか知らないからな、つまり俺達が魔法だと思  
っているものが今でも魔法だとは限らないと思うわけさ。

—なるほど、それで、お父様の書庫にどうやって入るのですか、窓  
から出れる外と違って書庫は本が傷まないように窓が無いですし、  
扉のノブも私達が届く高さじゃないですよ？

—.....

固まる、お兄様でした。皆さまこんにちは、私サクラは今日も愉快  
なお兄様と廊下を歩いております。

—お父様に、あけてもらおう

— お父様が今日出かけているからこそ、私達は書庫に向かっていると記憶していますが

— 母上様に、あけてもらう

— お昼寝中の、お母様を起こした瞬間私達は、二度とお母様の腕から離れられなくなるでしょうね

— ド、ドロシーにあけてもらう

— それが、妥当でしょうね

— なら、なぜ、最初からドロシーに頼まなかったのか。

— まあ、あまりドロシーに迷惑をかけたくないのでしよう、私達とは五歳違いの姉のような存在であり、メイド長のカタロニアさんの娘であるドロシー、カタロニアさん譲りの銀髪に薄い褐色の肌、八歳といっても、可愛い盛りのドロシーに実質三歳、精神年齢不明のお兄様は、あまり迷惑をかけたくないようです。

— いまさら、遅いとも思いますし、それを嫌がってもいないと思うのですが。

— お兄様

— どうした、妹

— ちょうどよく、ドロシーがこっちに歩いてきてますよ

— ……そうか

— ため息をひとつ吐くと、お兄様はその表情を普段の子供らしいもの

に切り替えました。

「ドロシー姉ちゃん」

そう言って、こちらに気づいて笑顔を浮かべたドロシーに抱きついていました。

お兄様、楽しそうですね。

「カレン様、サクラ様、今日はどうなされたんですか」

その端正な顔に微笑を浮かべた、ドロシーがお兄様を抱きとめながら聞いてきます。

「うん、サクラと二人で、文字のお勉強をしたいんだ、だから、お父様の書庫を開けてもらえないかな」

お兄様、ドロシーの前だと、大人ぶりますわよね。

「書庫ですか、かまわないですが、お二人にはまだ早いのでは」

ドロシーも、チョット困惑気味なようですね。

「お・ね・が・い」

上目使いで、笑顔を浮かべると「魔王の魔眼」なウインク、お兄様それは反則です。

「ハ、ハイ、わかりました」

ほら、ドロシーも顔赤らめてふらふらしてるじゃないですか。

けっか、扉は開きました。

ドロシーは、だめ、相手はクレア様なのよ、でもこの胸の高鳴りは、だめよ相手はまだ三歳なんだから、などぶつぶつ呟きながらお仕事に戻って行きました。

ドロシー、お兄様を盗ったら、許さないですよ。

おほん、それでは気を取り直して、本でも読みますか。

「あら、どうしたんだいドロシー、風邪かい？」

お母さんがお料理中の厨房に、戻ってきた私にお母さんが尋ねてきました。

お仕事中はとっても厳しいですが、普段はとっても優しいお母さんです。

「ううん、違うよチョットのぼせちゃっただけだよ」

「それが、チョットなのかい」

わたしに、そっくりな顔、口調に似合わないその綺麗な顔を、苦笑の形に変えると、優しくポンポンと私の頭をなでてくれました。お母さんの手はとってもあったかくて気持ちがいいです。

「ありがとう、もう大丈夫だよ、お母さん」

「そうかい」

と、優しい笑顔を浮かべると料理の続きに戻っていくお母さん。  
それを、見て私もお仕事に戻ることになります。

「あの、ませガキ、ドロシーに手出したら、消してやる」

そんな、呟きが聞こえたような気がしましたが、気のせいだと信じています。

## 書庫に行こう、妹よ（後書き）

幼少期は、ある程度の力の説明

子供時代は、ある程度の力の使い方を覚えていく時間

そして、十歳で学校編を始めたいと思っています。

今のところ、予定なので、そこまで、たどり着くのにどれだけかかるかわかりませんが、お付き合いいただければ幸いです。

誤字脱字感想などがありましたら書き込みをいただきたいと思います。

**考察する三歳児と、わずかに見えた光明（前書き）**

ふむ、もう題名があれな感じですが。  
書きたくなったので、今日二話目です。



## 考察する三歳児と、わずかに見えた光明

一妹よ

一なに、お兄様

一この文字はなんて読むんだ

一これは、火炎球みたいです、古呪魔法＞ルーンスペル＜で言うところのファイアーボールだと思うのですが

一マジか、何でこれが中級魔法になってるんだ、ファイヤーボールなんて火属性の基礎の基礎じゃなかったか？

一それが、今のレベルなんだからしょうがない、でもそのおかげで、魔法が使えるかもしれないんだから文句を言わないで

俺達が、書庫にこもるようになってから一ヶ月くらい経っていた。今では、お父様が出かけるとドロシーが、書庫の前で俺達を待っていてくれるくらいである。

ちなみに、俺達がもともと使っていた魔法は古呪魔法＞ルーンスペル＜と呼ばれていて、今は、古代研究を生業にした学者達が調べる程度のものに成り下がっていた。

ちなみに、古呪魔法＞ルーンスペル＜は力ある文字、古呪に魔力を込め、発動させる。「我放つ聖光の一撃」《セイクリッド・ブラスト》なんかがいい例だと思う。

つまり、力ある文字で事象を改変するそれが俺達が使っていた古呪魔法＞ルーンスペル＜であった。

今現在、魔法と呼ばれているのは、魔方陣に魔力を流し込んで使う系陣魔法＞エレメンタルスペル＜呼ばれるもので、魔法であり魔法陣に魔力を流し込む事で、魔法を発生させるようだ。

ちなみに、魔法陣を作り出せるほどの力量を持ったものはほとんどいないため、新魔法が一年に一個できればいいほどだといわれているらしい。

系陣魔法＞エレメンタルスペル<の、よい所をあげるなら、古呪魔法より圧倒的に魔力の消費を抑えることができるようになったことらしい。

たとえば、同じファイヤーボールを使うだけでもその魔力の消費量は、半分以上だというわけだ。

そしてもうひとつは、魔力さえあれば誰でも使うことができるというところらしい。

もちろん、一人一属性という原則は生きているらしいのだが、魔法の質を大幅に落とした結果、中級魔法程度までなら誰でも使えるらしいのだ。

もちろん、上級魔法はその系統保持者にしか扱えないそうなのだが。中級魔法程度は、その強さは込められた魔力の量で決まる、魔力を一必要とする魔法に十をつぎ込んでも威力が十倍になることは無いが、大体半分の五倍程度にはなるらしい。

まあ本来は、こんな魔力の無駄をするくらいなら、己の系統を極めたほうが早いので、こんなことする馬鹿はいないそうなのだが。

俺は、今、自分の系統を失っており、その馬鹿のことをできるだけの魔力があった。

これは、試してみる価値がありそうだと心に刻んでおく。

まあ、今やることは、この大陸文字を完全に読めるようになることだが。

なに、読めているじゃないかって。

これは、妹と二人で、一ヶ月間「古呪文字読解」という辞典を片手に、ウンウンうなった成果だ、古呪文字は読める俺達だったが、三

千年経って公用文字が大陸文字と呼ばれるものに変わっていたのだ。なに、なぜ大陸文字の辞典じゃないのかって。そんなもの読めるか、古呪文字で書かれている辞典がこれしかなかったから、古呪文字から逆引きしたんだよ。

おかげで、ある程度覚えるまで一月もかかってしまった。

とりあえず、しばらくは部屋で子供用の童話でも読んで、読解力をつけようか。

サクラは、積極的に辞典を開いていたせいで、軽い学術書程度なら読めるようになってしまったようだが、さっきの知識もサクラから教えてもらったものだ。

まあ、とりあえずこれで方針は決まった。

サクラは、魔力保有量を増やすことだ、体力の問題もあるにはあるが、今の身体ではどうがんばたって限界がある、それなら体力のほうは体の成長任せで、魔力を少しでも増やしたほうがよいだろう。とりあえず、今は、系陣魔法＞エレメンタルスperlの練習もかねて、魔術書「悠久の闇」を片手にぶつぶつやっている。

何個か、魔力保有量を増やす方法はあるのだが、はつきりいって、魔法を使い続けるて魔力を空にする、それを繰り返すのが一番危険性が少なく身体への負担も低い、サクラは今のまま思ったとおりにやらせるのが一番いいだろう。

もちろん、積極的に遊びに連れ出した体力をつけさせるのも忘れな

いが。

俺は、そうだな、さっさと文字を覚えてこの世界の勉強でもするか。なんかお父様の書庫を見てたら「魔王と勇者についての考察」なんて、気になる題名の本何かもちろほら出てきたしな。

後は、この有り余る力をどうするかな、いやまじでどうしよう、三歳児なのに素手で林檎とか握りつぶせるんだぜ。

とりあえず、力の制御と、勉強だな。

いやー、勤勉だね最近の三歳児は。

### 考察する三歳児と、わずかに見えた光明（後書き）

えーと、わざわざ評価ポイントを入れてくださった方、本当にありがとうございます。御座います。

感想などもいただけると嬉しいです。

それでは、誤字脱字感想などお待ちしております。質問でもいいですよ、それがいいインスピレーションになる場合もあるので。

## 心配性な親達（前書き）

今回は、つなぎなので短いです。

## 心配性な親達

「クレア、サクラ、体力が有り余っているなら、ドロシーと一緒に村に遊びにいくといい」

お父様の、そんな一言で、俺達は村に行くことが決まった。

まあ、ドロシーも俺達が生まれる前は、村の子供と遊んでいたらしい。

母上様が、俺達を身ごもった時点で、母親の暇つぶしに、散々勉強や裁縫などを叩き込まれていたらしく、しばらくは村にはいないそうだが。

「シルクちゃん元気かなー」

といった感じで、同年の村の友達に思いをはせている。

「そうですね、お父様、ドロシーも楽しみにしているみたいですし、同年の子供達と遊ぶことが一番手加減を覚えるのに最適ですものね」

「クレアとサクラ、難しいことは考えなくていいから、子供らしく楽しんできなさい、ドロシー二人を頼むよ」

お父様が、苦笑を浮かべながら俺をいさめてくる。

事実、最近子供らしい振る舞いが少なくなったなー、と喜んでいいのか寂しめばいいのか、困っているお父さんであった。

「「「はい、わかりました」」」

俺と、サクラ、ドロシーの三人で異口同音に返事をする、村に向かって駆け出していく。

それを見送るために玄関に出てきた妻に、愚痴り始める旦那そこにいた。

「はあ、成長が早すぎるのも問題だな、最近はおくの書庫の蔵書もほとんど読みきってしまったようだし、最近は二人で隠れて魔法の練習もしているみたいだしな」

「いいじゃない、私は楽しみよ、クレアは私に似て魔法の才能はあんまり無いみたいだけど、サクラはまるで、魔法に愛されているみたいな成長速度だし、クレアもクレアで、三歳で林檎をつぶしてしまうほどの力持ちよ」

「なに、それは知らなかったな」

「サクラは最近、古呪文字に興味があるみたいね、全部ドロシーから聞いた話だから、たぶん正確よ」

「あはは、三歳児に古呪の魔法を使われてしまったら、世界中の考古学者が卒倒してしまうな」

家の前、二人並んで子供達を見送る母と父、少しだけ寂しげな表情を浮かべながら子供達を見送っている二人であった。

失際は、使えるどころか超一流といってもよい腕前なのだが、その辺は知らぬが花である。

「それで、マリアナとカーリアが来るのは、今晚だったっけ」



「ええ、昨日近隣の村までたどり着いたって連絡が来たわ、今日中にはたどり着けると思うわよ」

「そうか、あの二人と会うのも久しぶりだな」

「そうね」

子供達が、見えなくなったのを確認して、ゆっくり扉を閉める二人、その背中にはさっきまでの寂しさは微塵も無く、久しぶりに会う懐かしい友に心をはせていた。

## 心配性な親達（後書き）

短めなので、気力があれば今からもう一話書く予定です。

## 村の子供達と、どこかずれてる兄妹（前書き）

ふう、無事に書けました

といっても二話で三千文字言っていないと思いますが。

## 村の子供達と、どこかずれてる兄妹

「ドロシー、久しぶりだねー」

とってドロシーに抱きついたのがシルクちゃんのような、赤い髪に日焼けした健康的な肌が印象的な女の子だ。

「ど、ドロシー、ひ、久しぶりだな」

と、どもっているのはカルマという金髪の男の子だ、ドロシーとシルクと同じ八歳で村の子供達のガキ大将みたいな存在みたいだ。

「ドロシー姉ちゃん、お久しぶりです」

「ドロシー姉さま、お久しぶりですね」

このませた二人は六歳、銀髪の男の子で、外で遊ぶより家の中で本を読んでいたと身をもって表現しているクレス、具体的には岩に座って手に持った本から挨拶の時しか目を上げなかった、と蒼髪の女の子で元気いっぱいの子、立ち振る舞いは淑女を目指しているように見えるが、どこか落ち着き無い、今にも走り出しそうな印象なフレスだった。

「こ、こ．．．んにち．．．は、アルマで．．．す」

この挨拶は、俺達と同じ三歳のアルマだカルマと同じ金髪でカルマの妹らしい。

どこか、おっとりとした女の子で人見知りらしい、ちなみに今はカルマの後ろからこちらをチョコチョコ伺いながらの挨拶である。

なかなか、可愛い女の子がこんな動きをしているのを見ると、もう、お兄さん悶死してしまいます。

ま、同じ年なんだけどね。

と、いう感じでこの五人が今この村にいる九歳以下の子供らしい。  
ん、なぜ九歳かって？

俺達の村では、九歳になると二年間、村の大人の誰かについている  
いろなことを学ぶことになっているからだ。

ちなみにこの村、フラグレス村は住んでいるほとんどが元冒険者とい  
うかなり特殊な村である。

もともと、冒険者の間で有名だったお父様が、国から爵位と何も無  
い土地を貰ったときに、そこに引退した冒険者達が集まってきたで  
きたんだという話である。

そのため、この村の住人は皆、それぞれ冒険者スキルを持ったもの  
ばかりであり、九歳になったら自分にあった師の元で一年間びっ  
ちり勉強する制度ができたのだという。

ちなみに、ほとんどのものは十一歳になったら王都グラマリアスの  
学校などに進学するのだが、進学せずに成人の十六歳まで師の下で  
従事する人もいるんだとか。

進学組にしても、その一年間で冒険者としての基礎を散々叩き込ま  
れるため、ほかのところから来た子供とは段違いの成績を誇るそう  
だ。

まあ、俺とサクラ、ドロシーの三人はそれぞれの親に従事するだろ  
うことは目に見えているので、あまり気にしたことは無いが。

そんなことは、今はおいというて、俺達も挨拶しないとな、とりあえ  
ずドロシーから。

「みんな、久しぶり、アルマちゃんをはじめましてかな？」

「は、はう」

と、俯きながら返事をする、アルマちゃん、可愛すぎです。鼻血出そう。

「サクラと申します、皆様よろしくお願いいたします」

と、身悶えているとサクラに先を越されてしまった、む、しかもサクラのやつ軽く「魔王の魔眼」使っていやがる。  
あああ、みんな、ほほ染めちゃって、見とれてるよ。

じゃ俺も、えん慮無く使いますか。

「皆さんこんにちは、ぼくの名前はクレア、サクラの兄です、これからよろしくお願いいたします」

「魔王の魔眼」を発動して皆の顔をゆっくり見回してから、ぺこりと頭を下げる。

—ふっ、ちよろいぜ

—ええ、ちよろいですねお兄様

—この分なら

—ええ、この分なら

—一すぐにお友達になれるな（なれますね）！！！！！！

どこか徹底的に考えがずれている気がする兄妹であった。

## 村の子供達と、どこかずれてる兄妹（後書き）

毎日チヨコチヨコ更新していきます。

いつ終わるのやら。

誤字脱字感想などぜひ書き込んでください。

作者そのままやる気に直結する単細胞なモノで。

だめなところでもぜんぜんいいですよ。

ちゃんと見てくれているのがわかって逆に嬉しいです。

別に、Mではないですよ。



**駆ける双子と、翻弄される子供達（前書き）**

幼少期初めての戦闘編（笑）です。  
まあ、ぶっちゃけ鬼ごっこですね。

## 駆ける双子と、翻弄される子供達

—妹よ

—はい、お兄様

—シルクが、前方にある岩場の後ろに隠れている、フレスは右の林の中を疾走中、アルマは花畑の方で隠れているのが見えているが、とりあえずは最後にしようと思う

—そうですね、こちらは藪の中でクレスが隠れて本を読んでいるのが見えますね、それと草原のほうをドロシーとその後ろをカルマが走っています

—そうか、とりあえずカルマには罫でも仕掛けておくか、まずは林の中のフレスだな

—ええ、そうですね、私よりお兄様の方が足が速いので、回り込んでください、私は後ろから追い込みます

—ああ、わかった

【以心伝心】にそう送り込むと、俺は身を隠すように走り始める、特にフレスには気づかれないように用心して走り出す。

サクラが、追っかけているはずのフレスの前方、意識が向いていない場所に回りこむと、

「フレス姉、捕まえたー」

笑顔で、フレスにタッチした。

「な、なんですって、……………まあ、あいては三歳ですし手加減ですわ」

絶対、そんな気持ちは微塵も無いだろう真剣な表情だったくせにフレスは、そんな負け惜しみを言っていた。

一妹よ、シルクに動きは

一まだ、岩場の後ろです

一わかった、林の方に誘導してくれ

一わかりました

そう返事をしたサクラが林から飛び出した岩場を迂回していくのが見える。

しばらくして、岩場のほうからシルクが、その特徴的な赤毛をなびかせてこっちに向かって走ってくるのが見えた。

俺は、ちょうどよい茂みを見つけると気配を殺してしゃがみこんだ。

タタタ、バサッ、

「シルク姉さん、つかまえたー」

茂みの横を通り過ぎるのを見計らって、茂みから飛び出すとシルクを捕まえる。

「へ、クレア君！まさか、誘導されたの？」

びっくりして放心しているシルクをほおって、近くの藪に隠れていたクレスにタッチ。

「クレス兄、みつけた」

「……………うん」

少し顔を上げて、口元に笑顔を浮かべるとまた読書に戻っていくクレス、本は好きだが、遊ぶことも一応嫌いではないみたいだ。

一さて、アルマ最後だから、次はカルマだな

一先ほどドロシーから離れて、草原を花畑の方に走っていききました

一む、花の冠でもプレゼントする気か、サクラは気配を消してドロシーの後ろで待機、俺もすぐ行く

一わかりました、まあ、見通しのよいところで体力勝負になったら流石に勝ち目が無いですしね、ここはせいぜいこの体躯の小ささを生かさせてもらいますか

一ああ

そう送ってから、静かに駆け出す、後ろのほうから三人分の驚いたような気配が伝わってきたが、今は気にしない。  
そう、今は人の恋路を、

一一邪魔したい（です）。

以心伝心な二人が、草原の真ん中でポケーとしていた、ドロシーの近くに潜伏してしばらく経った。

その手に、小さい花束を作ったカルマがこちらに向かって走ってくる。

「ドロシー！」

—お兄様、カルマが戻ってきました

「どうしたの、カルマ君、こんなところで待っていてって？」

—ああ、見えてる、俺はカルマの背後に回りこむ、サクラはドロシーを頼む

「そ、その俺、ドロシーのことが」

—青春ですね

「ん、私がどうかしたの？」

—まあ、今はラブコメより、鬼ごっこだ、この世は戦争、油断したほうが悪い

—お兄様、声が乱れていますよ

「お、おれ」

顔を真っ赤にして、一生懸命深呼吸しているカルマの後ろにそっと忍び寄る。

「うん」

「ドロシーの、ことが、……す「カルマ兄ちゃん、つかまえたー」」

「クレアさま！？え、いつの間に「ドロシー、つかまえましたわ」」

真っ赤な顔のカルマの後ろには、俺が、呆けているドロシーの後ろにはサクラが立っている。

「さて、後はアルマだね」

「さっきお花畑の方で、隠れているのが見えましたわ、兄さん」

そう言って駆け出す、俺とサクラ呆けている二人を置き去りに、あ、ちゃんとカルマに捨て台詞も忘れない。

そっと、近づくとかルマにしか聞こえないようにボソツと。

「ドロシーは、そう簡単には渡さないよ、カルマ兄ちゃん」

小悪魔の笑みを残して俺はサクラを追って走り始めた。

花畑の方で、二人分の歓声が上がったのは、それからしばらくして、カルマがクレアの言葉の意味にようやく気づいたころの話であった。

「何なんだ、あの二人は」

信じられなかった、鬼ごっこが終わってつかれきったのか、ドロシーの膝枕でアルマと一緒に寝てしまった兄妹が俺達を全員捕まえてしまったってことが。

確かに、俺はドロシーに久しぶりに会って、可愛くなっていたドロシーを見て完全に舞い上がってしまったが、それでも俺は、冒険者である親父とお袋の息子だ、野生動物などの気配は敏感だし、心ここにあらずでも三歳児のスピードを交わすなんて簡単なことだった。

もちろん、それじゃゲームにならないから、十分力量差を見せ付けた後はわざとつかまってやるつもりだったが、この二人はそんな俺を軽くつかまえて見せた。

ほかのみんなも、妹のサクラのほうに追っかけられているうちに、なぜか前にいた兄に捕まってしまったというし。

「うん、私もびっくりしたよー、サクラちゃんから逃げてたら、いつの間にか隣にクレアちゃんがいるんだもの」

てな、感じた。

何なんだこの兄妹、特に兄の方、最後の言葉は間違いなく俺に向けて放たれたものだった。

ドロシーは渡さないだと、本当に何なんだこの兄妹は。

「すごいよねー、クレアさまとサクラさまには、いつもビックリさせられるよー」

そんな、感じで軽く話し始めたドロシーの言葉に年長組みは、あり

えないものを見たような表情になったのだが、それはまた別のお話。



## 駆ける双子と、翻弄される子供達（後書き）

ちなみに、なぜ二人が鬼なのかというと、立候補したからです。  
三歳児なので二人一セットで、といった感じですね。

感想誤字脱字がありましたら書き込みお願いいたします。  
あと、あらすじを少し変えました報告しておきます。

**お客さんと、露見した片鱗（前書き）**

PVが8000、ユニークが1000を越えました  
皆様、ありがとうございます。

## お客さんと、露見した片鱗

一妹よ

一はい、お兄様

一誰だ、こいつら

一お兄様が知らないのに私が知るはずがありません

カルマやドロシー達と散々遊び倒して寝てしまった俺達、起きてみれば、時刻はもう夕方であり、俺達はそれぞれ帰路に着いたのであった、が、ドロシーとサクラ、俺の三人が家に帰ってきてみると、父親達と楽しそうに談笑している知らない二人組みがいた。

「おお、これがメアリィとクオーツの子供か、似てないな」

そのうちの一人、綺麗な金髪に長く尖った耳、綺麗な瞳は緑の光をたたえている。

長命種と呼ばれる種族であり、まあ、簡単に言えばエルフのお姉さんだ。

実際は結構珍しい種族なのだが、長く転生を繰り返していれば一人や二人であってはいえるし、長く生きる彼らだ、中には転生した後も会ったなんて笑い話もある。

それでも、魔王であり、もともと魔族以外の種族との接触が少なかったサクラはもとより、ドロシーもその可愛い頬を朱に染めて彼女の顔に見とれている。

「ふふ、女の子二人は、アイウスの美貌に見とれているみたいだけ

ど、男の子に振られちゃったみたいだよ」

アイウスと呼ばれたエルフのお姉さんに、茶々を入れたのは、蒼髪で女性用のローブを羽織った魔女、その立ち姿からなんとなくお父様の妹なのではないかと推測する、つまり俺から見たら叔母さんにあた人だな。

「クレア君、おばさんって言ったら、許さないわよ」

— おお、心を読まれた！

「どうしたの、キャシー」

不思議そうに、首をかしげているアイウスさん。

— お兄様、思いっきり声が出ていましたが

— なんだと！

「まあ、いいや、こんにちははクレア、サクラ、ドロシー、クオーツの妹のキャシーです」

おお、何とか流してもらえたようだ、何もしてないけどな。

「こんにちはー、私は三人の親友のアイウスです」

と、改めて、自己紹介をしてくれたキャシーさんとアイウスさん。ちなみに、アイウスさんが言っている三人というのは、キャシーのことではなく、ドロシーの母親のマリアのことである。もともと、五人は冒険者時代にクランを作っていたのだとか。

「「こんにちは」」

三人そろって、ご挨拶、やっぱり挨拶って大切だね。

「キャシー、アイウス、挨拶はその辺でいいだろ、みんなでご飯にしよう」

はい、ここでストップが入りました、犯人はクォーツことお父様です。

「そうね、ドロシー、マリアの準備を手伝ってあげて、二人は着替えておいでなさい泥んこじゃない」

そしてそれに追従するメアリイこと母上様。

「「はい！」」

もう一度、一糸乱れぬ返事をした後、俺達はそれぞれの場所に向かって駆け出していった。

「それで、さっきの話の続きだけど」

子供達が、駆けていったあと、私はさっきまでも話題に戻ることにした。

「三人に、ギフトがついていないか調べてほしいっていうのね」

ギフト、神々の祝福にして加護とも呼ぶべきもの、上神クラスがついている子供は本当に稀だ、たとえば下級神の加護であってもその力はあるのどれ無いものがあるし、ましてはそれが大天使クラスや女神クラス、上神クラスだったら物によっては災害と言ってもいいレベルの物になる。

「ああ、戻ってくる前に確かめて起きたい」

兄さんの表情はいつに無く真剣だった。

「はあ、わかったは、でも何もついて無くても落ち込まないでね」

そういつて、私はその魔法をつむぐ、長年かけて私が使えるようになった唯一の古呪魔法。

【我が前に、かの物の加護をさらせ】>マインドサーチ<

「ついてないほうが、どんなに良いか」

そんな、兄の呟きが私の鼓膜にこだました。

「ドロシーは、【プリメラの加護】妖精プリメラ、人のすぐ傍で生活し、たまに悪戯していく、主に家事などが得意となる加護だ」

まあ、マリアも同じ加護がついているはずだし、それはあまりおかしくない。

次は双子ちゃんだね。

「クレアには、【魔王の同化】」

「サクラには、【勇者の浄化】」

「そして、二人とも【転生神の寵愛】がついている」

そういつてから、魔法を解くと啞然とする三人の顔を見回す。多分、私も兄さん達と同じ表情をしていると思う。

「ねえ、兄さん、なにやったの？」

とりあえず、【転生神の寵愛】は置いとくとしても、残りの二つが意味不明だ。

この子達は、何をしたらこんなめっちゃくちゃの状態で生まれてくるのだろう。

そう思いながら、絶句している三人に最後のとどめを刺した。

「あと、私の力では読み取れないものが何個かあった気がする」

「」「つまり？」「」

「あの子達に加護は、これだけじゃないってこと」

私達四人の、表情は彼らが着替えて来るまではれる事は無かった。

## お客さんと、露見した片鱗（後書き）

だんだん、大人たちに気づかれ始めております。  
まあ、いいですが。

感想誤字脱字などがありましたら書き込んでいただけると嬉しいですよ。

ありすぎて指摘できないよ、という方、チョコチョコ治していくつもりなので根気強くお付き合ってください。



### 三歳からはじめる、ギルドの依頼（前書き）

某書籍風に、って感じで、三十歳でも保健体育でもありませんが。  
三歳なのに、ギルドです。

### 三歳からはじめる、ギルドの依頼

一妹よ

一はい、お兄様

一今日は、稼ぐぞ

一当たり前です

「チョット待て、その双子、まだ依頼を受けてないし、お前ら三歳組はギルド登録もしないといけないんだ、おとなしく座って待っているろ」

さっさと行こうとしていた俺達に、カルマからストップが入った。何だ、何だ、ちょっと年が上だからって生意気だぞ。

「クレア、お前今結構失礼な事考えているだろ」

と、いうカルマは置いておいて。

なぜ、いきなりギルドなのか不思議な方もいるだろうから説明しよう。

まあ、ギルドの説明は軽く、この大陸の格貿易主要都市に存在し雑多な依頼をこなしていくのがギルドだ。

細かく分ければ、商業ギルド【カンパニー】鍛冶ギルド【アルテミス】冒険者ギルド【ラグーン】などいろいろあるのだが、三歳の俺にはギルドと覚えておけば十分だって気がする。

さて、ここなぜ貿易都市ではない、このフラグレス村にギルドがあるのか不思議な人もいるだろう。

まあ、簡単に言えばここが冒険者の村だからだ、引退していろいろが腐っても元高名な冒険者がたくさんいるし根無し草だった冒険者が拠点としてこの村を使うのも珍しくない。

そのため、この村にはギルドがあるし、この村の子供達はそのギルドを使って小遣い稼ぎをしているのである。

まあ、この村に来る依頼は、村の中から俺達のような子供のために簡単な依頼が来るか、外から凶悪な依頼が来るかのどちらかなので中堅者の冒険者はあまり近づかなかったりするのだが。

「おい、クレア、サクラ、アルマ、さっさと来い登録を済ませるぞ」

おや、カルマが呼びだ、しょうがねーな、行ってやるか。

「それでは、この水晶の上に手を置いてください、ちょっと痛いので我慢してね」

「ふえ、痛い、や」

最初のアルマ、いやー、そのビクビクオドオド可愛いね。おにーさん悶えちゃうよ。

あれ、受付のおねーさんがその様子を見ながらハアハアしてるんだが大丈夫なのか。

いつも、この瞬間はたまらないわ、っておい。

「おい、次クレア」

ぐずっているアルマの頭をなでながら、カルマが俺を指定。

はい、こちらですよー、と、なんとなくいやな笑みを浮かべている

おねーさんの前まで歩いてく。

まあ、そのせいでちょっと緊張していた俺にはその気配を気づくことができなかったんだ。

「じゃあ、おねがいしま「てやー」」

――え？

いきなり、妹の思考と直結したと思えば水晶のうえにはもうひとつ見慣れた小さな手がおかれたいた。

「ち、ちよっとシルク姉さん？」

戸惑う、俺とサクラを置き去りにして発動しかけていた水晶がフル稼働。俺達の身体を生態電流の波が駆け抜ける、確かにこれはかなり痛い、足のつま先から頭のとっぺんまで静電気がかけ抜けていくと言えばいいか。

「はい、終わりました」

どこか、あきれた様子のおねーさんが二人分のギルドカードを渡してくる。

「ところで、君達、二人ががりって言うイレギュラーがあったとはいえ、三歳で称号もちとか化け物ですか」

渡しながら、そっと俺達の耳元に話かけて来るおねーさん、まあ、ほかの人には黙っというてあげるよ。

って、いい笑顔で水晶をしまいはじめた。

俺達は、なんとなくいやな予感を覚えつつも自分のカードに魔力を流してみた。

クレア      【魔天の片翼】

サクラ      【聖女の片翼】

ああ、確かに二人で水晶にてをおりたりしなければ、きっと出なかったですね。

いまさら、遅いと思いながらも、俺達は絶対誰にもカードを見せないと心に決めたのであった。

「おーし、じゃあ、皆カード持ったし依頼受けるか」

「今日の、お小遣い依頼は、お祭りの材料集めでしたっけ」

「あはは、まさか成功するとは、二人ともごめんねー」

一人笑い転げているシルクを除いて、話を進めていく年長組の二人。

「なら、シルクとカルマ君がいますし、ほかの子は特に武器なしでもいいですね」

「ああ、ちゃんと守るから任せておけ」

なかなか、頼もしいカルマに笑いかけるとドロシーが、みんなに号令をかけた。

「じゃあ、みんな【祭りの材料集め 子供の分】の依頼に出発するよ、いいかなー？」

「「「「はい!」「」「」」

こうして俺達は、ギルドを後にした、目指すは【祭りの材料集め  
子供の分】、なげーよ。

歩き出しながら、俺はふと思った。

—なあ、妹よ

—はい、お兄様

—俺達、称号逆じゃね？

—いまさらですよ、お兄様

子供の集団の最後尾、妹のため息が静かに虚空に消えていった。

### 三歳からはじめる、ギルドの依頼（後書き）

はい、まあ、無茶振りはわかっていますよ。  
でも、今書きたかったんですもの。

感想誤字脱視を書き込んでいただけると嬉しいです。

## 探索する子供達と、どこか不幸な双子（前書き）

PVが10000、ユニーク1400を越えました皆様ありがとうございます。

今回は初めての依頼続きます。



## 探索する子供達と、どこか不幸な双子

「クレスー、これは使えるかな」

「シルク姉さん、マタタビなんて持ってきてどうするんですか」

「クレス、こちらは使えるかしら」

「フレスそれはシルフィの効用草だね、これは依頼よりも普通に売ったほうがいいと思うよ」

「クレス、櫛の木はこんなもんでいいか？」

「カルマ兄、この系統の依頼受けてるの、今年はぼく達だけだろうから多めに持っていたほうがいいんじゃないかな」

「クレス君、紅茶はいかが？」

「ああ、ありがとうございますドロシー姉さん」

これは、ぼくらの依頼の光景である。

普段は、内向的なクレスだが、薬草などの植物の知識においては大人顔負けであるようだ。

—妹よ

—はい、お兄様

—出番が無いな

「はい、お兄様（泣）」

妹も、心の中で泣いているようだ。

さてと、冗談はこの辺にしておいて、俺達も仕事をしていくか、これもお小遣いのためだしな。

と、俺はすぐ近くに群生していた薬草らしき物をせっせと集めはじめる。

ちなみに、お祭りに薬草が必要な理由はただひとつ、酔いざましだ。可愛い、妹もとてとてと木の枝を拾い始めた。

「クレス兄さん」

「どうした、クレア」

普段と違って、珍しく笑顔のクレスがこっちを向いた。

「この、薬草みたいなのは使えるかな？」

「どれどれ」

そして、知識の海の中から、俺のもって来た草を探し始めるクレス。

「なあ、クレア」

「うん？どうしたのクレス兄さん」

「君は、酔っ払った大人を虐殺したいのかい？」

「へ？」

こちらと、毛頭そんな気持ちはなく、はてなと首を傾げる俺。

クレスも、三歳だからな、と、呟いてから俺のもって来た薬草らしきものの説明をしてくれた。

「これは、アンジャツシュの香り草って言ってね、この草の成分を注質したら、すごくいい香りの香水ができるんだ」

「ふむふむ」

なんだ、とってもいいものじゃないか。

「ただね、こういうわけなのかはわかんないんだけど、薬草と混ぜるとものすごい毒素を排出するんだそうだ・・・」

「ごめんなさい」

うん、わかればいいんだ売れば結構いい値段になるしね、俺を攻めるわけでなく、のんびりと解説してくれたクレスなのだった。ただ、その余裕が続くのは数秒後までだったのだが。

「クレス兄様、枝を集め終わりました」

「うん、ありがとうサク、・・・サクラさん」

「はい、どうしましたか」

はい、妹が何かやらかしましたか。

「いや、君ら二人とも狙ってもってきてるんじゃないよね」

「「はい？」」

なにを、言っているんだ、俺もこれ以上毒草になっってしまうものを集めるわけにはいかず、サクラの手伝いをしていただけなのだが。

「まず、サクラ」

「はい」

「君が集めてきたのは、大半が香り木と呼ばれるものなんだ」

「はあ、いいにおいがするのですか」

心底いやそうに、サクラの質問にクレスは答えてくれた。

「ドリアード枯れ枝と呼ばれるものでね、一般にお香などに使うものなんだけど、そのにおいの効果がね……気持ちよくなることなんだそうだ」

子供達の中には首をかしげているものもいたが、主に耳年間なドロシーとフレスが、真っ赤な顔をしている。

三歳で精神的に幼児退行していても、知識は残っているためその言葉にすぐ思いあたったサクラは、ものすごい勢いで集めた枝をぶん投げていた。

「で、次にそこで笑っているクレス」

「うん、ぼくが何か」

「君が集めているカリンの枝はね」

「うん」

「・・・・・・・・燃えないんだ」

今回の依頼、酔い覚ましよの葉草を集めること・祭りで使用する薪を集めること。

意味無いじゃん、カリンの枝!!!!

その後、顔を真っ赤にして枝を投げる少女と、どこか悲しげに枝を投げる男の子姿が見られる、不思議な光景があったそう。

## 探索する子供達と、どこか不幸な双子（後書き）

もうちょっと、後お祭りの説明で三歳編が終わります。

次は、五歳編を書いていこうと思っています。

誤字脱字感想ご意見などお待ちしております

**依頼完了？不幸が続く双子（前書き）**

依頼終了、今回は換金します。

## 依頼完了？不幸が続く双子

「シルフィの効用草は、フレスちゃんですね、五枚一束で四束あるので銅貨40枚ですね」

「ありがとうございますわ、アクア姉様」

「えーと、次はカルマ君、櫨の枝五十本つと、これは依頼品ですねカルマ君の報酬にちよつと色をつけときますよ」

「うん、ありがとう」

「ドロシーちゃんと、アルマちゃんがそれぞれ眠り草を五束づつ、うん、これで今回の依頼は達成ですね」

「「はい（・・・は・・・い）」」

「えーと、後はシルクちゃんのマタタビ三束とクレス君のマリスの野苺、シルフィの毒消し草ですね」

「「はい（はいなー）」」

「シルクちゃんは、マタタビの代金銅貨10枚、クレス君は合計して銅貨50枚です」

「「ありがとうございます」」

「えー・・・と、最後に双子ちゃん」



「・・・・・・・・はい」

「どこで拾ってきたのこれ？」

「・・・・・・・・森で」

「あの森にこんな凶悪な植物、原生していなかったと思うんだけど」

「・・・・・・・・」

俺達が、カリンの枝とドリアド枯れ枝を捨てた後、事態は悪化の一步をたどった。

あの後、数回同じことを繰り返して、最終的に持って帰ってきたのは。

サクラ 人面樹の右腕？、呪怨樹の根っこ、妖狐の紅梅香の枯れ枝

クレア 櫨の枝（水精霊憑き）、宝樹の枝（対火耐性）、カリンの枝（不燃物）

カリンの枝はいつの間にか紛れ込んでいた、何かもう呪われてんじやねとしか言いようが無いほど、散々な結果だった。

さすがに、呪怨樹の根っこなどはサクラも捨てる気にはなれなかったようで、しょうがないのもって帰ってきたというわけだ。

クレスなんて、最後のほうは呆れ通り越して顔引きつってたし。

「まあ、君達がうなだれているわけもなんとなくわかるんだけど、

報奨金は君達が一番多いよ」

アクアさん、慰めてくれるのは嬉しいけど俺達は普通に依頼をこなしたかったです。

「クレア君は、金貨1枚、サクラちゃんは銀貨30枚だね」

ちなみに、お金は、玉貨・銅貨・銀貨・金貨・白金貨・幻想貨とあり、価値的には玉貨が100枚で銅貨になり、それぞれ100枚づつ次の貨幣に繰り上がるようになっていく。

普通の一般人が一日に稼ぐのが大体銀貨一枚といわれているため、俺達は三歳なのに一日でその30倍と100倍の金を稼いだことになる。

のだが、俺達は落ち込み続けていた。

「なあ、妹よ

「はい、・・・お兄様

「俺達に、普通の生活というものは満喫できないんだろうか？」

「私も、それが言いたいです。

俺達はどうしても悲しくなった、酔い覚ましと薪をとりに行ったはずなのに、もって帰ってこれたのは呪われた枝と不燃物のみ、くそ女神さま俺達に平穏は無いのか？

「ええと、双子ちゃんとアルマちゃんは今日が初日でしたね、これは初依頼成功のプレゼントです」

気を使って、くれたのかアクアさんが、受付の中から小さなポーチのようなものをこそと取り出す、いまさらかもしれないが、アクアさんは、俺達の登録の時に苦痛の表情を恍惚とした表情で見ていたおねーさんだ。

「「「・・・はい・・・ありがとう・・・ございます」」」

くしくも、普段どおりのアルマちゃんと、落ち込んでいる俺達のしやべり方は完全に同じだった。  
アクアさんもさすがに引きつった表情で俺達、一人一人にそのポーチを優しく渡してくれた。

「それじゃあ、みんなこれからがんばってね」

「「「「「「はい！（・・・はい）」」」」」」

その返事とともに、俺達はギルドから帰還した、俺達の金は多過ぎたから、みんなと分けようと思ったんだけど、自分がとったものは自分のお金とするべし、と断られてしまった。

これが俺達の初依頼、依頼の報酬は人数分で銅貨160枚だったのに、俺達双子の換金して得たお金は銅貨13000枚分だった。

「とりあえず神様、三歳でこんなにお金は要らないんだが

「激しく同意です、お兄様

「まあ、いいだろう明日からはお祭りだし、お金を使う機会もあるだろう

一ええ、そうですね、お兄様

そう思念を飛ばしてから、お金をとりあえず入れておいたポーチを、腰のベルトにくくりつける、サクラはいつもどおり母上様の趣味のゴスロリ姿なのでサクラの、ポーチも一緒にくくりつけた。

金貨銀貨130枚はいつているのに、そのポーチはまったく重みを感ぜさせなかった。

満足げに、うなずいて歩き出す。

このお金は、お祭りの間にすべて使い切つてやるという決意を、二人分、小さい胸に抱いた俺達はゆっくりと帰路に着いた。

ぼく達は、知らなかったんだ、お祭りで必要とするお金は、多くても今日フレスタたちが稼いだ程度なんだってことを。

## 依頼完了？不幸が続く双子（後書き）

クレアがあんなに報酬が多かったわけは宝珠の枝（笑）です。  
なぜ、子供が行くような森にそんなものが？不幸属性じゃないでしようか。

まあ、簡単に言えば二人にはそういう類の祝福もついている（憑いている？）ってことです。

神の祝福がついている時点でラックは人より上ですから（笑）。

感想誤字脱字ご意見などありましたら書き込みお願いいたします。  
次回からはお祭り編になる予定です。

三話くらいかなー

## 春の始まりのお祭り（前書き）

年齢のところで、修行期間を一年から二年に変更いたしました。

## 春の始まりのお祭り

新年祭、その名のとおり、新しい年を祝うお祭りであり、いろいろな、意味を持つお祭りでもある。

まず、ひとつ、このお祭りの時に生まれた日は関係なく、全員がひとつ年をとる。

この世界では、誕生日という概念はあまり無く、その日に皆、年をひとつ重ねるのだ。

つまり、このお祭りが、終わったとき俺達は、四歳になるというわけだ。

そして、この新年祭は別れの祭りでもある、そう、村の人々にとっても、俺達にとっても。

まず村単位で言えば、お祭りが終わった時十一歳になった子供達が、それぞれ、学校に旅立って行く。

そして、九歳になった子供達は、村の大人一人に従事して、十一歳になるまでの二年間いろいろな勉強をするのがこのフラグレス村の決まりだった。

つまり、見知ったところで言えば、シルクとカルマがお祭りの後から、子供達から離れ、冒険者達について修行期間に入るというわけだ。

ドロシーは？って、マリアさんについて家事の勉強をするらしいからいままでどおりだ。

しかし、このような別れがあればこの祭りは出会いの祭りでもある、引退した冒険者や、腰を落ち着けた冒険者が大体この時期を狙って流れてくるといふこともあるが。

今年生まれた子供達、つまりこのお祭りで一歳になる子供達のお披露目といった側面もこのお祭りは持っているという理由もある。

アイウスとキャシーの二人組は、お祭りが終わったらまた旅だつらしく、せっかく仲良くなれたのに残念と行った気持ちもあるが、今は新しくくる年を祝うことが先決だ。

ちなみに、この世界、一年の流れとしては、春の季節、夏の季節、秋の季節、冬の季節があり一期がそれぞれ90日、一年で360日となっている。

場所によっては、それぞれ季節ごとのお祭りがある地域などもあるらしいのだが、このフレグラス村が大々的に祝っているのがこの新年祭であった。

一妹よ

一はい、お兄様

一財布は持ったか

一はい、新しく買ったベルトにポーチもくくりつけてあります。

そういうサクラの今日の格好は、いつのどおりのゴスロリドレスに、腰におしゃれな黒のベルトバックルを締め、ギルドで貰ったポーチをくくりて、といった完全？装備である。



一さて、いざ行かん、俺達の戦場に

一ええ、お兄様、わかっていますわ

この貰いすぎたお金を使い切る。

そう胸に決意した俺達は、それぞれ顔をあわすとニコリと微笑みあう。

さあ、決戦の始まりだ。

ガチャ、と、決意を胸に闘志を燃やしている俺達の部屋にドロシーが入室してくる。

そして、俺達の顔を見て怪訝な表情をすると。

「クレア様、サクラ様、お祭りは明日からでございますよ、今日はもうお眠りになってくださいませ」

そう、優しく俺達に忠告してくれた。

ああ、そうさ、知っているよ。

誰が、いまからお祭りだって言ったよ、ただ、何か興奮して眠れなかったんだよ。

「ああ、わかった」

「わかりましたわ、ドロシー」

とりあえず、そうって、布団に入る俺と、自分の部屋に戻るサラ。

そして、ドロシーが部屋の明かりを消して自分も寝に戻った後も、しばらく屋敷の中を子供二人の思念が飛び交っていたそうなの。

—あしたが、楽しみだな妹よ

—ええ、そうですね、お兄様

その思念だけは、年相応の感情を持ってフヨフヨと夜の闇に消えていった。

## 春の始まりのお祭り（後書き）

はい、次から本格的にお祭り編、かけるのかな？微妙です。

誤字脱字感想ご意見などありましたらどしどし書き込んでくださいませ。

お待ちしております。

## 少女のお買い物（前書き）

お祭り、何とかかかっているでしょうか、といっても。  
背景表現なんてこれポツチもしていない自身がありますが。

## 少女のお買い物

新年祭、喧騒の中、露天を出している冒険者らしき青年の前で、小さな少女がじっとひとつの商品を凝視していた。

じーーーーーっ

「お、お嬢ちゃん？、これに興味があるのか？」

じーーーーーっ

コクコク

首を縦に振っている目の前のお嬢さん、確かこの領地の領主であるクォーツ様の娘だったはずだ、その彼女がなぜか、私が珍しいからと持ってきた商品をじっと凝視している。

深遠祭で、その商品、多分魔道具なのだろうが、を売ってしまおうともってきたが、食いついてきたのがまさか、こんな小さなお嬢さんだとは、と内心苦笑しながらも、いままで、この道具を使いこなせる者はいなかったし、貴族の娘だしこの少女になら売ってもいいかなとなんとなく考えてみる。

「売ってやってもいいが、結構高いぞ」

「いくらですか？」

「ふむ、金貨一枚、いや、お嬢ちゃんにはおまけして、銀貨三十枚でどうだ」

まあ、腐っても魔道具だしな、がんばってまけてもこれが限界だな。  
ま、こんな小さいこの子が手が出る値段ではないだろ、と、たかを  
くくりながら、私は赤字覚悟な値段を提示する。

「はい、わかりました」

と、少女は、腰のベルトにくくりつけたポーチをこそこそとあさり  
だす。

ははは、自分の宝物でも出すのかな？など、その年齢に沿った行  
動を期待していた俺に、

「はい、銀貨三十枚です」

その少女は、ちゃんと使える銀貨三十枚を俺の目の前に出した。

「へ？」

「どうしたのですか、足りると思うのですが？」

その、予想外の行動に呆けてしまった、俺はしばらくして、相手が  
貴族のお嬢様だってことを思い出す。

さすが、お嬢様、普通の平民の月収の三十倍をぼんと出すとは。

「ああ、お小遣いかい？」

「いいえ、違います」

お小遣いじゃない？じゃあ、なんだ、すでにその年で、祖父か誰かの遺産でも継いでいるのか。

そんな疑問を浮かべている俺に、彼女はその答えを出してくれた。

「ここは、冒険者の村ですから、自分で稼いだお金です」

そういつて、お金を俺の前に置くと、俺が売りに出していた魔道具の腕輪をその少女は楽しそうに腕にはめはじめた。

「さすがだな」

流石冒険者の村、たとえば貴族令嬢だろうと、たとえば五歳にも満たない幼子だろうと、その一人一人に冒険者の血が流れているというわけか。

「はい、ありがとうございます」

俺に対してそう一礼すると、少女は彼女の兄らしい子供の元へ、楽しそうにかけていった。

その表情は、歳相応の可愛らしいものだったが。

「まさか、買われてしまうとな、な」

走りさる少女の小さな背中に、俺の眩きだけが追っかけていった。

「何を買ったんだサクラ？」

「結構、強力な魔道具のようだな？それは

「腕輪ですわ、兄さん」

「ええ、魔力を流すことによって、自分の属性武器になる特殊な魔道具のようです」

「似合っているよ、サクラ」

「そうか、良く手持ち金だけで買うことができたな」

「ありがとうございます、兄さん」

「ええ、もちろん魅了も使いましたが、相手が子供と侮ってくれたことと、何より、いままで、まともに使いこなせる人がいなかったのではないかと」

表面上は、とても可愛らしい笑顔を浮かべる妹、俺にとっても、サクラがこれから生きていく中で、サクラに合った武器は必要だと考えていたので、この段階で、その候補ができたことは大変喜ばしいことだった。

「綺麗な、装飾だね」

装飾、いやその刻まれた魔法陣こそが、この腕輪の本質なのだろう。

「発動させなくても、武器形態はどんな物かわかりそうか？」

「うん、よくわからないけどねー」



「無理ですね、最低でも、魔法陣を探るには微量の魔力の行使が必要でしょうから」

「どんな、意味か今度しらべてみるか？」

「なら、それは今度にしておくか」

「はい、兄さん」

「ええ、そうですね、お兄様」

ふむ、あとは、この魔道具が、少しでもサクラの身の守りになることを祈るのみだな。

さて、俺はどうやってこのお金を使いきろうか。

早々と、手持ち金を使い切ってしまった妹を見ながら、兄はそう悩み始めた。

## 少女のお買い物（後書き）

とりあえず、サクラが一步前進です。

体力馬鹿なクレアと違い、一般人まで身体能力が落ちてしまったサクラには、それなりの武器をあげたかったので。

誤字脱字感想ご意見などありましたら、感想のほうに書き込みお願いいたします。

## 少年のお買い物（前書き）

ちよつと、グダグダになってしまった感じが。  
そのうち直すかもしれません。

## 少年のお買い物

「うーん、これか？ いや、こっちの方が」

新年祭の露店のひとつ、恰幅の良い店主の前で、一人の少年が品物の前に座り込んで、うんうんうなっていた。

「お坊ちゃん」

「うん、どうした店主」

何なんだろう、この子供は私の商品に興味を持ってくれたのは嬉しいのだが、そこに座り込まれてしまつては、ほかのお客さんが寄り付いてこん、何とかならんか。

「小物類をさっきからごらんになっているようですが、どなたかにプレゼントでしょうか？」

「ああ、そうなんだ」

「お相手は、どのような方ですか」

「うむ、友達なのだ、男達の方は、すぐ決まつたんだが、女性のほうがなかなか決まらなくてな」

同世代のお友達の送るようですね、ふむ、見たところお金はちゃんと持っているようですし、適当なものでも売りつけてやりましょうか。

「ちなみに、男性の方達になにを差し上げるか伺っても？」

「うむ？ ああ、父上に『ハイデル公爵のストーリーカー日記』を、カルマに『馬鹿でもわかるラブレターの書き方』、クレスに『シルフィの上級薬草学』をあげようと思っている」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この、坊ちゃんのお父上とカルマと言う少年がどんな人かは、わかりませんが、何かうらみでも買ったんでしょうか。

「あら、クレア君じゃない、お買い物かなー」

二人の男性の心配をしていた私の耳に聞こえてきたのは、艶やかな声、目を向けるとそこには、白磁のような肌を朱に染めた、美しいエルフの女性が、さっきまで、品物を眺めていた少年の後ろから、抱きかかえるように少年に乗りかかっているのが見えた。

「やめてください、アイウスさん、酒臭いですよ」

へ、アイウス、いまこの少年はこの美しいエルフの女性のことをアイウスと読んだか？

「いいじゃない、堅いこと言わずにさー、おねーさんが一緒に選んであげるよー」

「む、それなら・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、坊ちゃんが悩んでいる間に、アイウスと呼ばれたエルフさんは楽しそうに品物を選び始めている。

「うーん、これかなー、ドロシーちゃんはやっぱりこれよねー」

「まだ、頼むとは、む、でもそれをドロシーにあげるのは賛成です」

「やっぱりー」

流されてるよ、流されてるよ坊ちゃん、そんな、商人の心の叫びに気づくはずも無く、アイウスと坊ちゃんは人数分、商品を選び終わったようだ。

「えーと、銀の髪飾り、ピンクのリボン、黒のカチューシャ、ユリシア草のブローチ、純銀のメリケンサック、シルバーネックレスです、おまけして全部で銀貨50枚になります」

「えーと、一個多いのですが」

四人分のはずだったのにと、不思議そうな顔をしている坊ちゃん、そして、商品を包もうとした私の手の中からするとシルバーネックレスが引き抜かれる。

「授業料よ、クレアくん」

私の手から、抜き取ったシルバーネックレスを笑顔で、首にかけると、アイウスと呼ばれたエルフの女性は笑いながら立ち去った。

「・・・・・・・・」

「なにが、したいんでしょうねあの人は」

そういつて、坊ちゃんは六個分の銀貨50枚を払って、店から出て行く。

「アイウスって、確かエルフの……………」

私の弦きは誰に聞かれることも無く、坊ちゃんが振り向くことも無かった。

ふむ、シルバーネックレスと純銀のメリケンサックが一番高いんだが。

やりきれないものがあるな。

少年の心の声

悪乗りしたアイウスに買わされた母上へのプレゼントと、勝手に入れられていたシルバーネックレスが

一番高かったことを店主から聞いた少年の、悲しい声であった。

## 少年のお買い物（後書き）

次で、お祭り編は終わると思います。  
多分．．．．．

誤字脱字感想ご意見がありましたら感想のほうに書き込んでいただけたら嬉です。



### 三歳、最後の日（前書き）

えと、四歳になります。

### 三歳、最後の日

「はい、アルマ、ユリシア草のブローチだよ」

「ひ、ひゃい、えと．．．ありがと．．．う．．．ごさいま．．．  
す、いや．．．、ありがとうございますひゅ」

なぜ、言いなおしたんだろう、結局噛んでるしね。

いやーアルマは可愛いなー。

「これは、フレス姉さんに」

そういつて、顔を赤くして固まっている、フレスにピンク色のリボンを渡す。

「あ、ありがとうございますわ、クレア君」

返事も、そこそこにプイツと後ろを向いてしまった。

「こ、これは、プロポーズ？いえ、でも、相手はまだ三歳なんですよ．．．」

何か、ぶつぶつ言っているが、後ろを向いてしまっているのだから聞かない。

髪につけたところも見えたかったんだけどなー。

「で、これはクレス兄さん」

とりあえず、フレスはおいでいおいて、クレスに『シルフィの上級薬草学』を渡す。

「いいのかい？　こんないいものいただいてしまつて」

「うん、依頼の時にお世話になったし、あの時見せてくれた知識をもっと伸ばしてほしくてさ」

「きみは、時々本当に三歳かわからなくなるね」

そういつて、俺から『シルフィの上級薬草学』を受け取ったクレスは、普段見せない嬉しそうな表情だった。

「それで、これはカルマ兄にと」

「・・・・・・・・クレア、俺に何かうらみでもあるのか」

そういつて、俺が差し出した『ハイデル公爵のストーカー日記』を前に硬直したカルマ、

「あ、ごめんカルマ兄、間違えた、こっちだこっち」

まあ、わざとだな。

「これは、これで複雑な気分なんだが」

俺から、ちゃんとしたプレゼント『馬鹿でもわかるラブレターの書き方』をしぶしぶ受け取るカルマ。

まあ、いいこれでドロシーに成功するなら、何かふざけたことを言

っておいでなので。

「あ、そうだ、店主さんが言ってたんだけどね」

「うん、店主がどうかしたのか」

「その本、ラブレターの書き方が書いてあるだけで、成功するかどうかは、その人の努力しだいだってさ」

ぴしつと音が鳴りそうなくらい見事な硬直です、カルマさん。

ナイス、リアクション。

「はい、サクラ」

石になっているカルマを無視して、サクラの頭に黒のカチューシャを優しくつけてやる。

「ありがとうございます、お兄様」

そういつて、サクラは嬉しそうに微笑んだ、のだが。

『お兄様?』

そんな、心の声が聞こえそうな視線が周りから、いたい、いたい。

その視線に気がついたのか、サクラははっと口元を押さえている。

一可愛いしぐさだけど、今更遅いぞ妹よ

「すみません、お兄様

さてと、後はドロシーと、父親と母上様だね。

「はい、ドロシーこれ」

「はい、ありがとうございますクレア様」

「つけてみてくれるかな、え．．．と、ドロシーの銀の髪に似合うかなって、思ったんだけど」

「はい」

優しく、微笑むと、ドロシーは銀糸のようなその美しい髪に、銀の髪留めを絡めていく。

「はい、できました、似合っていますかクレア様」

その姿は、

「うん、とっても綺麗だよ、ドロシー」

綺麗過ぎて、俺はそんなありきたりな言葉しか言えない。

「はい、とっても綺麗な髪留めですね」

「え、いや、そういう「クレアくん」」

訂正しようとする、俺にシルクの声が割ってはいる。

「シルク姉、いまドロシーと話して」

「そんなことよりさー、私にはなにをくれるのかな？」

へ？　そういえば俺が買ったものって、本三冊、アクセサリー六つ、いま現在残っているのは『ハイデール公爵のストーカー日記』と純銀のメリケンサックのみ。

あはは、買うの忘れてた。

といえるわけも無く。

「シルク姉さんにはこれを」

と言って、『ハイデール公爵のストーカー日記』をその手に渡した俺だった。

子供達から離れ、一人酒をたしなんているエルフの女性、そこに、さっきまでからかっていた少年の母親が近づいてきた。

「アイエス」

「ん、どうしたのメアリィ」

その返事のように、メアリィは握っていた銀のアクセサリーをいとおしそうに軽く握った。

「うちの、可愛い息子からプレゼントを貰ったんだ」

「ほんとうにー、よかったじゃん」

笑い上戸なのか、アイエスはこらえられないといった笑みをその口元に貼り付けている。

「うん、貰ったんだ、アイエスから、って純銀のメリケンサックを．．．」

「ぶっ．．．、へ、ちょっと、クレア君？、裏切ったの？」

そのときになって、アイエスは自分の酔いがさめていくことに気がついた。

まるで、自分の周りを渦巻くように流れている、懐かしき闘気、昔共にあったその懐かしい闘気を感じてアイエスは頬を引きつらせる。

「メアリイ、メアリイ？落ち着いて？闘気が駄々漏れになっているわよ．．．」

「誰の．．．、誰のせいと思っているんだー！ー！ー！」

一人の、女性の断末魔の悲鳴が、夜空に響きわたる、その光景は、息子からプレゼントが貰えなかった父親がとぼとぼと近づくまで終わらなかった。

エルフの悲鳴が聞こえる中、当の少年が暗い笑みを浮かべていた。

ふ、ざまあみろ。

あんたのおかげで、泣き始めた父親がウザイ上に、シルクにあげたプレゼントのせいで、シルク以外から、流石にそれはひどくないかと冷たい視線を向けられたりと散々だったからな。

母上様に、廻られるといいわ！

と、さてと、そんなことより。

目の前で、新たな年を告げる鐘の音が響き渡る、その音を聞きながら少年は、

—これで、やっと四歳だ。

そう、感慨深く思っていた。



### 三歳、最後の日（後書き）

お祭り編終わりました、どこがお祭りやねんと言ったつつこみはなしの方向で。

それと、ドロシーをほめようとしたところ、クレアは悪くありません、作者が語彙不足だけです。

誤字脱字感想意見などありましたら感想のほうにお願いいたします。

## 友との別れと、逃れられないお茶会（前書き）

えー、後一話かな、まとめて打っているわけではないので。  
たぶんですが、後一話か二話で第2章が終わります。

## 友との別れと、逃れられないお茶会

新年祭から、10日ほど経った日、フレグラス村の入り口、といっても門などは特に無く街道へ道がつながっているといった程度なのだが、そこには、村のほとんどの人間が詰め掛けていた。

この場に村のほとんどの人間がいるのは、学園にいく子供達と、もう一組カルマとシルクが冒険者の師匠と共に旅に出るのを見送るためである。

「シルク、行ってらっしゃい、無理しちゃ駄目よ」

「うん、大丈夫だよおかあさん、お父さんが一緒だから」

母と同じ、太陽のような赤い髪を力強くなでられて、シルクは寂しそうに笑っている。

その横では、大きな長弓を背負った、がっしりとした体形の父親が、心配そうな母に笑いかけていた。

「お．．．おにちゃん、行ってらっしゃい．．．」

「おう、アルマもがんばれよ、特にどこぞ双子の世話とかな」

目じりに涙を溜めながら、それでも何とか泣くのをこらえているアルマと、それをみて自分よりも可愛い妹が、どこぞの双子の毒牙にかかったりしないか心配な兄だった。

ちなみに、カルマはまだ手のかかる妹がいるため、修行の師匠は、親ではなく、大剣を背中に背負った女性の冒険者である。

そうして、同じように学園組もお別れがすみ、といっても、ドロシ

ーのような例外以外は大概二年間旅に出ているので、学園組にとっては一時帰宅のようなものだ。

修行組みに、ひとつづつ武器が村の皆からプレゼントされる。

その役目は、領主でもある父のクオーツだった。

「はい、シルクには宝珠の枝で作った短弓を、カルマ君にはミスリルの小刀だよ」

短弓、小刀といっても大人の人間にとってであり、まだ九歳になったばかりの二人にはちょうどいいサイズであった。

「宝珠の枝って！」

「ミスリルって！」

『そんなに、いい物をいただいていいのですか？』

ちなみに、ミスリルの製法はエルフしか知らないのだが、今回アイエスが村に来ていたから、インゴットを貰って製作した、宝珠の枝はご存知のとおり、どこぞの双子の収集品である。

「うん、二人の門出だからね、でも、だからこそこの武器に見合うような立派な冒険者になってくれ、それがぼくらみんなの気持ちだからね」

普段、どこぞの双子のせいで良く落ち込んでいる姿が目撃される領主様だったが。二人にとっても村のみんなにとってもこのときばかりは、自慢の領主といえる立派な激励の言葉に、少なからずほかの村人から拍手が起こる。

「あー、それとシルクちゃん」

「はい、クオーツ様」

「うちの息子から、君にだって、お祭りのシルクちゃんの分を買い忘れてしまったからって」

そういつて、ミスリルの腕輪を渡す。

「あ、ありがとうございます、すごい綺麗な模様ですね」

「うん、ぼくも良くわからないんだけどね、多分古呪文字じゃないかな」

このときのクオーツの考えは当たっており、これは、サクラの腕輪をみてクレアがおもいついた品だった。

シルクが弓を使うことを想定して、その腕輪には『きたれ、万物を打ち抜く、普遍の矢よ』と、刻まれている。

「魔宝具らしいから、将来、魔法がうまく使えるようになった時に使ってくれといっていたよ」

「魔宝具！？、そんな高価なものいただいてしまったいいのですか？、それに私は、魔法は使っても古呪文字は読めませんよ」

「そこは、あれだ、魔宝具だから魔力を流せば具現化するとか何とか、ごめん、たまにぼくも息子がなにをいつているかわからなくなるんだ」

そこまで話して、クオーツはシルクの父が出発を促しているのがつく。

「まあ、細かいことは気にしないで、いまは綺麗な飾りだとおもっておけばいいと思うよ」

「はい、ありがとうございますって、クレア君にいつておいでください」

その言葉を聴きながら、村人達の元に戻っていくクオーツ。

「あれ、俺にはなにも無いの、あれは、間違えたとかじゃないの？」と、呟いているカルマに、反応してくれるのは誰もいなかった。

そして、カルマも促されるように馬車に乗り込んでいく、

「まあいいか、ドロシーには会えなかったし」

その手に、白い便箋が握られていたのだが、それを知っているのは、三日三晩不眠不休で例の双子兄から受け取った本を読み漁り、何とかラブレターを書き上げたことを知っているのは、

「お、おにいちゃん．．．ふびん」

母の服のすそを握りながら見送っている妹だけであった。

村を見下ろすように建つ、お屋敷、春の暖かさが気持ちいい庭でそこに用意されたテーブルから、お菓子をつまみながら少年は村の方を見ながら黄昏ていた。

—そろそろ、出発したところかな

—ええ、そうですね、お兄様

—シルク喜んでくれたかな

「うん、きつとすごく喜んでくれたと思うよ」

心の中での会話に答えが、妹意外から帰ってきた。

「あれ、ぼく口に出してた？」

「ええ、駄々漏れでしたわ、兄さん」

そうして、三人顔を見合わせて笑う。

笑うことしかできなかった、目の前にはシルクに送ったミスリルの腕輪の失敗作と、それを前に黒いオーラを出している母親。

その後ろには、陰に隠れるようにアイウスの金髪、そして横には失敗作を興味深そうに弄繰り回しているキャシー姉さんが座っている。

「二人とも、そろそろ覚悟は出来たかしら」

母親から放たれるどす黒い闘気に、流石に双子もたじたじなっていた。

「はうえさま・・・あの、そのうしろのくろいものをおさめてくれませんか」

ああ、かなり片言になってしまった。

その息子の言葉にため息ひとつ付くと、母親は鬨気を収める。

「なぜ、そこでため息なのでしょう、お母様」

「当たり前でしょ、子供が尋常じゃなかったら、ため息も出るわよ」  
サクラの率直な疑問にキャシーが答える。

「普通の子はね、メアリー姉さんの鬨気をまともに浴びたら気絶するのよ、ドロシーみたいに」

そういつて、銀髪の少女を指差すとドロシーはいつの間にか眠るように意識を失っていた。

「はあ、うすうす感じてはいたけど、ここまでとは思わなかったわ」

その言葉に、二人とも縮こまってしまう。

「で、そろそろいいでしょ、わかること、話せることだけでいいの、あなた達はなぜそこまで子供離れしているか話して頂戴」

それが、母親の真摯な頼みだと言うことに、気づかぬ二人のわけも無く。

「わかりました」



「兄さん」

「いいんだ、ぼくが話す」

兄が、静かに話し始めるのだった。

そして、大人二人はこの後、この二人からどんな言葉が出てきても  
良いよう、腹をくくる。

そう、大人二人、アイウスはメアリの陰で、静かに気を失っていた。

## 友との別れと、逃れられないお茶会（後書き）

ちなみに、シルクのプレゼントを忘れていたのはネタではなく。  
作者が本当に忘れてました。

シルクごめん！

ここまで書けば、わかると思いますが、話しの後半はいままで考えていた物とぜんぜんちがいます。

ああ、どうしよう、悩みどころですね。

誤字脱字感想意見などありましたら感想のほうに書き込みお願いいたします。

## 双子の告白（前書き）

長かったので、四話に分けました。

一挙に、書いたら、一回消えたんです、（泣）

だから、四話です。

## 双子の告白

冒険者達の村を見下ろせる小高い丘、その丘に建てられた一軒の屋敷、

その春の花を咲きみだらせる庭には、テーブルとイスに座って向かい合う三人の大人と、三人の子供がいた。

ただし、その雰囲気はまどろむような春の陽気に反して、とても談笑と言えるようなものではなかった。

金髪のエルフト、銀髪の少女が、眠るように気を失っていることを考えても、とてもじゃないが、そこに親子が楽しく談笑していると、いった雰囲気は感じられない。

「先に聞いてもいいでしょうか、母上さま、確かに、たびたびうかつな行動をしていた自覚はあります、でも、どこで気が付いたんですか」

度重なる、図書室への進入、隠れて行った系陣魔法＞エレメンタルスペル<の練習、おかげで系陣魔法＞エレメンタルスペル<を中級レベルまである程度こうしできるようになった、まあ、ギルドなどの依頼で行使したことは無いし、実戦でどこまでできるかわ、わかっていないし、属性を失ってしまった俺はこれ以上魔法を極めることができない、そんな袋小路まで俺はたどり着いてしまっていたのだが。

「そうね、去年の夏あたりかしら、私が二人が家出したと騒いだころから、二人の雰囲気が変わり始めたのに気が付いたわね」

なんと、俺達に意識が戻ったのは大体そのころ、もちろん【以心伝心】で妹と話し続けてはいたが、ある意味、身体はずっとまどろん

でいたといってもいい。

つまり、あのころこそが、身体に明確に意識が宿ったころだといっても良いのだ。

「そうでしたか、つまり最初からずっと気づいておられたのですね」

まあ、昨日まで、歩くのもしゃべるのも年相応だった子供が、いきなり書庫に忍び込んだり魔法の練習をしているのに気が付けば、嫌でも変に思うだろう。

「最初って言うのが、いつかなのかは私にはわからないけど、そうね、うすうす感じていて、キャシーに魔法であなた達について調べてもらって、確信したといったところかしら」

キャシー姉さんに、なにを調べてもらったというのだろう、俺達の特異性を明確にできるような魔法がいまの世界にも存在すると言うのだろうか。

確か、古呪魔法にそんな魔法があった気もするが、聖属性、しかも戦闘用に限定使っていた俺は補助用の魔法をほとんど知らない。

今回、シルクにプレゼントした魔宝具にしても、俺一人じゃ考えに詰まりサクラにかなり迷惑をかけた、これからは、属性に左右されない、そういった補助魔法も練習するべきかなと真剣に悩んでいる俺であった。

「確か、古呪魔法にそういったものがあつたと記憶しています、兄さんは、戦闘限定の魔法だけを突き詰めていたので知らないかもしれません」

一ああ、そうだな、今度からはその方向も勉強して置くよ

サクラの補足に心の中で頷きながら、キャシー姉さんを見ると少なからず驚いた顔をしていた。

「古呪魔法を知っているなんて、あなた達はやっぱり」

「ええ、ご察しのとおり、私達は転生者です」

サクラの言葉に、母上さまとキャシー姉さんは、表情を暗くはしたが、そこまでは驚いていないようだった。

うすうす、感じてはいたのだろう。

俺達から感じる違和感、あるはずの無い知識。

考えてみれば、簡単にわかる話であった、ただ、その事実を認めるか認めないか、それができるかの話のだけで。

「そう、じゃああなた達のギフトも転生前の存在に関係があるのかしら」

ギフト？何のことだ。

一妹よ

一はい、お兄様

一ギフトってなんだ？

一私にも、わかりません、多分この『三千年』の間に生まれたものなのでは。

—そうか

なら、訊ねればいいだけのことだ、確かに『三千年』の間に生まれたものもあるだろう。

それを、まったく考えていなかった。

もしかしたら、俺達が知らないことはまだまだあるのかもしれない。なんせ、いまの世界は、俺達が最後に過ごした世界から『三千年』後なのだから。

「すみません、キャシー姉さん、ギフトとは何なのでしょうか？」

## 双子の告白（後書き）

### 一話目



## キャシーの独白（前書き）

二話目ー

キャシーさん苦勞人ですね。

説明回はこの人がいると便利です。

## キャシーの独白

「すみません、キャシー姉さん、ギフトとは何なのでしょうか？」

目の前の、四歳になったばかりとは思えないほどその瞳に知識の色をたたえた少年、私の甥に当たるクレアのその言葉は、私には到底信じられないものだった。

仮にも、私の甥と姪は、自分達のことを『転生者』だといっていた。そして、この二人の語った話しの内容を聞いた限り、この二人は過去の人間の特徴などを引き継いだ子供として言われる転生者「先祖がえり」と呼ばれている者ではなく、その意識や知識をすべて引き継いだ魂として転生した「転生者」なのだろう。

実は、転生者と呼ばれている者は以外にも多く、ものすごく珍しいといったものではない。

ただ、それは「先祖がえり」を転生者のくくりに含んだ話ではあるのだが、それでも決して少なくは無い、私もいままで数人会ったことがあるということを考えれば、いるところにはいるといううことがわかるだろう。

ただ、ここまで滅茶くちな話は聞いたことが無い、少なくともギフトといったものが発見されたのは、500年ほど前だと聞いている、『転生者』としての「転生者」と話をした時も、彼らはギフトの存在を知っていたのだ。

というか、あいつがそのギフトを見つけた人間だったらしいが。つまり、ギフトの存在を知らないということはクレアとサクラの二人は200年以上前から転生してきたと言うことだ、魔道具をに簡単に古呪文字を刻めるなら少なくとも、古呪魔法が衰退したと言われている300年前より前なのだろうと思ってはいたが、500前とはとても信じれるものでは無かった。

少なくとも、私はあいつの言葉を信じてはいない。

「そう、二人ともギフトの存在を知らないほど前からきたってことね、わかったわ

とりあえず、ギフトっていうのは神の祝福と呼ばれるものよ、神の加護っていいわね」

ギフトとは、神々の祝福にして加護とも呼ぶべきものであり、上神クラスがついている子供は本当に稀である。

たとえば下級神の加護であってもその力はあなどれ無いものがあるし。ましては、それが大天使クラスや女神クラス上神クラスだったら、物によっては災害と言ってもいいレベルの物になる。

「なるほど、つまりギフトを調べたことによって、ぼく達の『存在』がなんとなくわかったというわけですね」

「まあね、思いつき【転生神の寵愛】を受けているのを発見すれば、流石に気がつくわよね」

それはもう、もろこれだって感じだったからね。

クレアとサクラの様子をみると、何かに苛立ちを覚えているようだった。

流石に、某腐れ女神様に殺意を覚えているとはわからなかったが。

「でもね、それだけではわからないものもあるのよ」

そう、この子達についているギフトはそれだけではなかった。そう、

クレアには、【魔王の同化】

サクラには、【勇者の浄化】

といった、不吉な予感しかないギフトがついているのだ。

「クレア、あなたには【魔王の同化】、サクラには【勇者の浄化】というギフトがそれぞれついているわ、この意味、二人にはわかるかしら？」

そして、このあと、私は心底聞かなければ良かったと後悔する。

「ああ、なるほどやっぱりそんなことになっていましたか」

「そうですね、兄さん、流石にそこまで明確に提示されるとはおもっていませんが」

まるで、二人がもともとそういう『存在』だったような言葉、心底不吉な予感しかないその言葉に私は耳をふさぎたくなる。

『ぼくは、もともと勇者で、私は、もともと魔王で、ですから』

ああ、こんなことならアイウスとドロシーみたいに気絶していれば良かった。

キャシーの独白（後書き）

二話目

やっぱり、母は最強です。(前書き)

二話目

**やっぱり、母は最強です。**

とつくの間に、私の頭のなかは真っ白になっていた。

優しいて知識が豊富な義理の妹が、変わりに話していてくれなければ私はとつくに卒倒していたのではないだろうか。

『ぼくは、もともと勇者で、私は、もともと魔王で、ですから』

そして、このによって、実質私には止めが刺されたといっても良い。

いや、良かった。

そのとき、二人の、可愛い我が子達の表情をみていなければ。

そう、その表情は、どこかあきらめているようなそんな表情。

金と黒の髪、互いの髪に仲良く色違いのメッシュをいれ、互いに色違いのオッドアイに憂いの色を浮かべて、鏡写しのようなその端正な顔に悲しみの表情を浮かべている可愛い我が子を。

私は強く抱きしめた。

もう、絶対に離さない。

だだ、そう思った。

その心に偽り無く、後は行動に移すのみ、昔から考えるのは苦手だが、それでも自分の感覚には自身がある。

いまこの二人は、悲しんでいる、諦めている。

転生者？魔王？勇者？

そんなものは私には関係が無い。

私にとって二人は、可愛い我が子以外の『存在』では無いのだから。

「おかあさま」

「ははうえさま」

その言葉だけはずっと変わらない、たとえどんなになろうとも、初めて言葉を覚えた時からずっとそう呼んでくれる二人。

「いいの、それ以上話さなくていい」

「でも、ぼく達の話聞くためにここに来たのでは無かったのですか」

そう言う、クレアの表情はわからない。

もしかしたら、ひにくげに表情をゆがめているかもしれない。

もしかしたら、私を馬鹿にしているかもしれない。

でも、それでもいい、私は馬鹿でいい。

馬鹿でいいから、それ以上は聞きたくなかった。

わかっていたから、わかってしまったから。

この子達は、この話をした後、私達の元から消えるつもりだろう、



すべてを吐き出して、すべてを残した上でこの子達は私達の前から消えてしまおうだろう。

根拠など無くても、わかってしまう。

誰よりも、優しく、誰よりも心配性なこの子達は、私達に迷惑をかけないように消えるつもりだろう。

そんなこと、決してさせはしない。

「もういいのよ、だってあなた達、その話を、これ以上踏み込んだ話をしたら、私達の前から姿を消すでしょ」

二人をいったん解放すると、もちろんその華奢な肩はしっかり掴んではいたが、私は、二人の目をしっかりみてそう語りかける。

「そんなこと」

「無いと言える！絶対に私達の前から消えないといえるかしら」

反論などさせない、強い口調で二人をだまらせる。

「クレア、サクラ、あなた達がなにを背負っているかは、私にはわからない」

そういつて、二人を片手づつ抱きしめると。

そう耳元に語りかける。

「でもね、私はあなた達の母親なの

あなた達がなにを背負ってしようと、私はあなた達を愛しているの

よ」

たとえば、あなた達の過去になにがあるかと私は軽蔑も差別もしない。  
すべてを受け入れるから、

だからお願い。

「私に、すべてを失わせないで、悲しませないで

わたしに、覚悟が無いだけかもしれない、でもね、愛する子供達を  
失うほどの悲しみを味わった時、

私は、朝起きた時に笑う自信は無いわ、夜寝るときに後悔をしない  
自信は無いわ

ただ、何も無い明日のために生きている自信はないわ」

いつの間にか、涙が流れていた。

もしかした、ずっと私は泣いていたのかもしれない。

その涙をぬぐう、そして、いつの間にか泣いていた二人にもう一度  
視線を合わせると、はっきりと言いつ切った。

「これは、脅迫ととって貰ってもいいわよ、つまり、二人が勝手に  
いなくなったらお母さん

死んでやるから」

その言葉に、私は、俺は

――負けた

と、思った、気がついたら、母親に抱きついて泣いていた。

取り戻すみたいにな、そして、すべてを使い尽くすかのように、僕らはそのときだけ子供に戻っていた。

もしかしたら、安心したのかもしれない。

最後まで話していれば。

間違いなく、ぼくは、私は、この暖かい場所を、この夢のようないまの日常を、捨てていただろうから。

ごめんなさい、悲しませてごめんなさい。

泣かせてしまって、ごめんなさい。

そして、いつか、遠くない未来に、すべてを話すことができる時まで、もう少しの間だけ、ぼくらの、私達の

— 母親でいてください。

**やっぱり、母は最強です。（後書き）**

ふふふ、すべて暴露を期待した方、残念でした。  
母の力は偉大ですよ。

こんなところで、すべてネタばれしてやるものですか。

「丸く収まれば、すべてはいいじゃないですか」b y女神様（腐）（前書き）

二章最後です。

「丸く収まれば、すべてはいいじゃないですか」by女神様（腐）

ぼくが、帰ってくると。

ぼくの寝室では、愛する、妻と子供達が、抱き合うように眠りについていた。

その姿に、微笑を浮かべて、子供達の頭に軽くキスをする。

最後に妻の頬にキスをしてぼくは、静かに寝室を後にした。

だれも起こさないように、静かに扉を閉めて居間に向かう、そこにはぼくと同じ青い髪の妹が、そのひいき目にみても綺麗な顔を憂いに染めて座り込んでいた。

その隣では、ずっと気絶しているふりをしていたらしい、エルフの女性が同じような表情をして果実酒をのんでいた。

「で、どうだった？」

二人の給仕をしていたマリアに同じものをたのんでから、ぼくは二人前に座り、そう切り出した。

「なにが、にいさん」

相当、不機嫌そうだが、これはなかなか手ごわそうだな。

「もちろん、可愛い我が子のことさ、昼間話したんだろ」

領主としての仕事が無ければ、いや、今回の仕事が見送りで無ければ、絶対自分もいたかった。

流石に、今日はメアリイに、いかないと言ったら、叩きだされてしまったが。

「最悪よ、いろいろな意味でね、もちろん、私の気分的にもね」

我が妹にしては、珍しく本当に落ち込んでいる。

「アイウスは、どう思った」

埒があかなそうだったので、標的を我かんせずなエルフに向ける。

「そうねー、世の中には知ってしまったほうが不幸なこともあるのよね」

それ以上は、何も言ってくれなさそうだ。

どうしよう、すごい気になるんだけど。

「いまは、知らないほうがいいことでもあると思うよ、それこそ、メアリイみたいにすべてを捧げるほどあの二人を愛せるなら別だけれども」

「兄さんにはむりね、私の兄だもの」

ひどい言われようだ、この二人かなり鬱憤がたまっているようだな。そこまで、破壊力があつたのかあの二人の言葉は。

「はあ、しかもあれよりも奥があるっていうのがね」

「本当、信じられないわ、私なら発狂してそう」



ああ、二人だけわかる話題で盛り上がるのは、やめてくれ。  
お父さん、泣きそうだ。

「義姉さんも、大概よね、私、自分の子供からあんなこと聞かされたら、愛しているなんてとてもじゃないけど言えないわ」

「流石。メアリイって話よね、私、ぞっとしたけど、少し泣いちゃったもの」

メアリイが、何をしたっていうんだ、そこんとこ詳しく話してもらえませんか二人とも。

「しかし、あんな重いお話を淡々と話すわよねあの二人も、我が姪甥ながら、末恐ろしいわ」

「でも、流石にメアリイには敵わなかったみたいね、鬼の目にも涙って言うのかしらねああいうの」

おい、アイウスぼくの子供は鬼じゃ無いぞ、そして、あの子達は君らに何を語ったんだ！

彼女達の愚痴と共に夜はふけて行く。

父親が、いくらがんばっても、わかったことは妻が最強だったという、わかりきった事実だけだったそうだ。

母の、腕の中でお兄様と一緒に眠る。

どこよりも暖かく、決して離してはいけないぬくもり。

額には、父親の優しさが残っているし、目の前には、ずっとあこがれ続けていた、『存在』が兄として寝ている。

そして、私達を包み込むように母が。

—こんなに、幸せでいいのだろうか

心の中で独白してみる、兄には届いているだろうが、深く眠っているのか返事は無かった。

もしかしたら、明日には終わってしまうかもしれない、そんな、幸せ。

幼い姿をした彼女は、誰よりも幸せの尊さを知っていた。

その、『存在』として与えられた役割のために決して味わうことの無かった、日常の尊さを。

それがどれだけ、壊れやすく、はかない存在であることを。

だからこそ、お母さん、お父さん。

あなた達が、許してくれる限り私達はそれを手放さない、どんなことがあっても守って見せる。

—それが、私の誓い

—なら俺は、お前を、サクラがその誓い捨てない限り、サクラを守ろう、それがサクラが誓いを守りことにつながるのなら

その瞬間、寝ていたはずの兄から、意識が流れ込んでくる。

【以心伝心】決して途切れることの無い、初めて得た絆、兄となつた『彼』と私と対極の『存在』とつながった絆。

そして、初めて得た、初めて感じた家族の暖かき。

そのすべてに包まれながら、私は眠りにつく。

明日は、何をしようかな？

お母様とドロシーもつれて、ピクニックに行こうか、兄と、いやクレアと修行に励もうか、それとも前から気になっていた論文を、お父様から借りてこようか。

そんなふうに、考えることができる、今日を、今をいとおしく思いながら。

私は、静かに目を閉じた。

—おやすみなさい、明日はもっといいことがありますように

「丸く収まれば、すべてはいいじゃないですか」by女神様（腐）（後書き）

何とかうまくまとめることができたでしょうか？

やっぱり、かなり強引になった気もするのですが。

三話目をメアリー視点にすると決めて、書き始めるとあれ以外の終わり方が思いつかなかったので。

それでは、次話からは三章になる予定です。

気まぐれな作者なので、間に外伝を挟むかもしれませんが、そのときは温かい目で見守ってください。

誤字脱字感想意見などありましたら感想のほうに書き込みをお願いします。

ふう、一日でこんなに書いたのは初めてだからな。

誤字が多そうだ。

それでは、また、できれば三章、やっちなえば外伝でお会いいたしまししょう。

なあ、しばらく休憩してもいいかな？

雅なる月のごとく 一幕(前書き)

はい、本編をお待ちの皆さま

外伝が入りました。

しばし、お付き合いください。

## 雅なる月のごとく 一幕

「さて、クオーツ君」

「……………どうしました？先生」

「卒業試験の内容が決まったよ」

「……………今度は何ですか、ライオネルの巢に一ヶ月間こもればいいですか、それともフェンリルと三日三晩眠らずに戦ってこればいいですか、ああ、それとも水魔法の新しい術式を見つけてこいとか？」

「ごめん、……………ぼくもやりすぎたとは思っているよ」

「……………で、何ですか卒業試験は」

「うん、飛竜を倒してきて」

「は？」

「うん、飛竜を倒してきて」

「……………いや、聞こえてはいますよ、ただ自分の耳と、先生の頭の中身が信用できないだけで」

「信用してくれなくてもいいけど、ぼくは本気だよ、君ならそれくらいできるだろうし」

「そんな、信用ほしくくないです」

「まあ、がんばって来てくれたまえ、『蒼の魔道士』君」

その言葉と共に、俺が6年間慣れ親しんだ教室であり、目の前でありえない課題を出してきた彼女の研究室の扉は閉じられた。

その扉の向こうにいるであろう見た目十歳、実際年齢十五歳の天才の名をほしいままにする師に、久々に殺意を覚えた昼下がりの午後だった。

学園都市ラグリオン、ラグリオン学園を中心に発展をした都市であり、主要産業が人材の育成といった典型的な学園都市である。

道端を歩くのは年若い少年少女ばかり、時たま壮年の者を見かけても、職業を聞けば7割方は教師と答えるだろう。

ラグリオン学園の校風をあげるとすれば、それは『自由』が一番しっくり来る。

学科も自由、職業選択も自由、そのまま学園の教師に就職するもよし、冒険者となって夢を追いかけるもよし、兵役につくもよし。

学科も、選択性であり、卒業するだけならば一学科、たとえば薬草科で六年間、土を弄繰り回して。学科の教師から出題される進級課題をクリアすれば卒業できる。

と、いった校風である。

学科によっては、先生が六年間冒険者をやってこい、と課題を出して、何しに学園に来たのかわからないといった話もあるくらいだ。

そして、俺が六年間受けた学科もこの例にまけないほどめっちゃくちゃなものだった。

本来なら、一学科だけでなく、少なくとも三学科、多い人なら六学科ほど受けて大体、卒業して行くのだが。

入学時に、『水魔法の応用魔法学』という学科を気まぐれに受けたのが運の尽きだった。

自分の系統魔法を学べるならと、彼女の研究室の扉を開けた瞬間、俺は、自分より一歳年下、見た目的には四五歳年下の少女の、放った実験中の新魔法にぶち当たった。

その魔法は、後に水系統の最上級魔法と呼ばれる「絶対零度」ダイヤモンド・ダストだった。

彼女が、魔法を行使した理由としては、冷えたバナナが食べたかったという理由だったそうだが。

それによって、俺は一ヶ月間彼女の研究室に冷凍保存されていたそうだ。

一カ月後に、学園長が何とか魔法を解除、水系の親和性が高かったおかげで、冷凍保存されても仮死状態ですんだのは良かったのだが。



学科の、仮入科期間は入学から一ヶ月間であり、俺が目覚めたときには、彼女の研究室に六年間入り浸るしか俺には選択は残されていなかった。

結果として、歳が近いこともあり、というか俺の方が年上だったこともあり、彼女が時たま吹っかけてくる無理難題を、死ぬ気で解決して言った俺には、いつしか色の属性称号『蒼』の名前が与えられるほどの魔法使いになっていたのはまた余談ある。

まあ、普通の学科であれば、進級試験に天狼族<sup>フェンリル</sup>とちよつと三日間ほど不眠不休で戦ってきてなんて無理難題は言わないだろうから。

その進級試験が有名になって、俺には今だ学科の後輩がいなしな。

そんな、ことをぶつぶつ呟いている俺が、今いるのは、俺が六年間下宿に使っている酒場のカウンター席だった。

時たま、小遣い稼ぎにおっちゃんの手伝いなどしているが、ここは学園都市、稼ぎ方はいろいろある。

ひとつに、ここに通っている生徒が入学時に全員、何らかのギルドに登録しているということだ。

俺のような、魔法使いや剣士科に通っているやつなら冒険者ギルドに、同じ下宿で六年間同じ釜の飯を食ってきた俺の友達であるガイアなんかがそのいい例だ。

そして、ほかのギルドの例を挙げるなら、錬金士<sup>アルケミスト</sup>ギルドなんかがあったり、従士者ギルドなどがあったりする。

従士者って言うのは、簡単に言えばメイドとか執事のことだ。

実際には、かなり高度な教養と、戦闘力が必要な学科であり、人気はあるが従士学科を専攻して卒業できる者はかなり少ないといわれている。

とか何とか、初歩的なことを思い出して現実逃避している俺に、さつきから声がかかっている。

「おい、クオーツやーい、卒業試験はどうだったー？」

「……………」

「おい、おい、……………おいこら氷の彫像、返事をしろ！」

「もう一度、いってみろガイア」

氷の彫像、それは入学時に俺についたあだ名であった、まあ、一ヶ月間いろいろな方法で俺を溶かそうとした先生が、俺を外に置き忘れて一週間くらい、リアル過ぎる氷の彫刻として軽く恐怖の対象となっていたらしいからな。

「なんだよ、機嫌悪いな、またちびっ子に無理難題を出されたのか？」

「……………お前は、どうなんだよ？」

「俺か？、俺はCランク以上の討伐依頼をクリアすることだってよ、ラクシヨーだぜ！」

「だよな、それが普通だよな」

ちなみに、天狼族<sup>フェンリル</sup>は幼体でもCランクであり、飛竜種は弱いものでもAランクといわれている。

泣いていいかな？

「あいつは、俺を卒業させる気が無いんじゃないかと最近思うよ」

「は？」

思わずでた、俺の本音に返ってきた返事は心底呆れたような間拔けな声だった。

「おまえ、なに今更なこと言ってんの？」

「何のことだ？」

「知らなかったのか、毎年毎年、お前に無理難題を吹っかけるから、流石に学園長が、アイナ先生を注意したら」

ちなみにアイナとは、お分かりのとおり俺の担当教師の名前だ。

『あの子を卒業させるつもりは、ありませんから！』

「と、おっしゃったそうだ」

って、

「は？」

「その顔をみると本当に知らなかったみたいだな、魔法研究塔あたりじゃかなり有名な話しだぞ」

魔法研究塔、その名のとおり新魔法の開発などを行っている学園の研究室郡であり、俺の教室でもあるアイナ先生の研究室もそこに居を構えている。

そして、いま、数少ない友の証言により、文字通り俺は頭を抱えることになった。

卒業させる気無いつて、真剣かあの女！

まあ、そこまで聞けば今回の卒業試験の意味もわかるというものだ。俺を絶対に逃がさないつもりか。

「愛されてるねー『蒼の魔道士』くん」

「うるせー、勘弁してくれ……」

「で、そこまで愛されているクォーツ君の卒業試験、お題は？ ババンといってみよう！」

テンション高いなー、こいつ、俺もこう生きれたら楽なのにな。

「飛竜種の討伐」

「へ、マジ？」

「ああ、本当に卒業させる気が無いらしい」

「愛されてるね．．．．クオーツ」

「やめてくれ、頼むから」

そして、酒場の喧騒とは裏腹に静まり返る俺達。

「なあ、クオーツ」

「なんだ？」

「こうゆうのもさ、．．．．ヤンデレって、ゆうのかな？」

俺には、その質問に沈黙するしか回答が思い浮かばなかった。

## 雅なる月のごとく 一幕（後書き）

と、いうわけで父親の過去編です。

もちろん母上様も出で参ります。

次話で、出てくる予定ですので！。

またお会いしましょう。

誤字脱字感想意見などありましたら、書き込みお願いします。

雅なる月のごとく 二幕(前書き)

母上登場です。

## 雅なる月のごとく 二幕

「クオーツは飛竜種の討伐か、アイナ先生は相変わらずだね」

「あはは、キールもそう思うか、可愛い顔してやることがえげつないよなー」

反論できない、できるわけが無い。俺は酒場のカウンターに身体を投げ出しながら、新しく会話に加わった錬金科であるキールの顔をにらみつけた。

目をほとんど隠している綺麗な銀髪のなかから見せる静かな瞳、ほとんど表情がわからないその顔をわずかに笑みの形にゆがめたキールと目が会う。

「なに、笑ってるんだよキール」

「笑う？、そうかぼくは笑っているか」

おまえ、気がついてなかったのかよ、

確かに、キールはほとんど笑わない、俺達といるときは結構わらうのだが、それでも、ほかの人間と話しているときと比べて、と言ったレベルの話である。

一説では、誰がキールを笑わせることができるかといった賭けをした連中がいるほどらしい。

なぜ、俺が知っているかといえば、ありがとうお前のおかげだ、と



言って俺に金一封くれた馬鹿がいるからだ。  
なんか、かけに大勝ちして相当儲かったらしい。

「おまえ、めったに笑わないくせに、こんなことで大笑いしてんじやねーよ」

「すまん」

といって、後ろを向いたキール、その肩が震えているのを俺は見逃さなかった。

「まあ、いいじゃん、キール・クオーツ、依頼掲示板みにギルドにいこうぜー」

「あ、ああ、そうだな」

「そういえば、キールは試験何なんだ」

錬金士のキールは、もちろん錬金科の生徒である。

錬金科の試験はもちろん生産系のほうが多い、のだが

「卒業試験は、誰かの討伐依頼に同行して、その素材で何かを作ることだ」

「ふうん」

楽そうなおことで、うらやましいかぎりだ。

「だから、ぼくは、クオーツの依頼について行く」

「へ？」

楽しそうだからな、そう俺に言い残してキールは隣の席から立ち上がった。

「キールがいくなら、俺も行こうかなー」

「ガイア、おまえはCランク以上の討伐だろうが！」

「だからCランク以上でしょ、飛竜種は」

「あー、・・・ふん、勝手にしろ」

かつてにするよー、ってガイアも俺をおいてキールと一緒に歩き始める。

「ふん、馬鹿共め・・・」

おれも、立ち上がって、歩き出す。

どうしようも無いほどに、にやけようとする頬をこわばらせながら。

飛竜は、と依頼掲示板を凝視する俺、

ぱっと見、見つけることができた飛竜種の討伐依頼は三つ、

レッドワイナスと呼ばれる飛竜の討伐がひとつ、レッドワイナスは

飛竜種のなかでも、翼竜目ワイバーンと呼ばれている飛竜であり、前足の変わりに翼がついているのが特徴のワイバーンのなかでもレッドワイナスは5メートルほどしかない小型の飛竜で、ランクはAだ。小型ならランクはC位なのではないか、と勘違いする冒険者もいるのだが、そこはレッドワイナスもやはり飛竜種、通常の飛竜の臂力を失った変わりに、この竜はかなりの魔力と狡猾さを持つ、正直言って魔法士である俺の一番苦手とするタイプだ。

雷電と呼ばれる飛竜の討伐が二つ目、雷電は雷属性を常時放ち続ける飛竜種で、極東の島国に良く見られる蛇竜目と呼ばれる種で、特徴的なのは鼻に二本の髭を持ち翼を持たないと言うところだろうか、世界中の竜種の研究者がその飛行方法を研究し続けているが、いまだ解明にはいたっていないそうだ。

飛竜種としては、知能が高く手を出さなければ温厚なのがこの、蛇竜目の特徴とも言える、中には例外もあるが雷電はこの例外に当てはまらず、基本は温厚だ。

しかし、蛇竜目は神性がかなり強いいため気候が意図せずに操れてしまうのがこの種が、討伐対象になるおもしろ理由である。

簡単に言えば、雷電の場合は常に雷雲をその身に纏っているため、この竜が上空を通り過ぎると万雷が落ちるとというのが雷電の常時落雷と呼ばれる特性である。

最後の三つ目は、レッドドラゴンである。

まあ、こいつについてはそう語ることも無い、飛竜種でもオーソドックスな火竜目サラマンダーと呼ばれる種の中で代表と呼ばれているほどの飛竜だ。

飛竜種は絶対的に数が少ないのに、レッドドラゴンはオーソドックスといわれるほど目撃情報が多い、その凶暴性にあいまって討伐依

頼も多いのになぜ、そこまで目撃情報が多いのか、つまり、レッドドラゴンの強みはその強大な生命力にある、Sランクの冒険者クランでも撃退はできても、討伐になるとかなりてこずるといわれるのがレッドドラゴンである。

ちなみにレッドワイナスがAランク、雷電がSランク、レッドドラゴンがAランクである、が、レッドドラゴンは撃退が比較的容易にできるのでAランクと言われている、のであって、今回は討伐先ほと言ったように討伐のランクはSランクとなっている。

「まあ、妥当にレッドワイナスかな」

「だろうね」

「おれは、何でも良しーだぜ」

まあ、魔法防御力が高いレッドワイナスはかなり相性が悪いのだが、ほかの依頼を見ると相性が悪いとか言ってられないほど狂悪なラインナップだったので当然却下、消去法でレッドワイナスだな。

と、考えていると、俺が手にするよりも速くレッドワイナスの依頼書に手が伸ばされた。

『あ』

「あら、失礼しました、依頼が見えなくなってしまいましたか？」

そういつて、目の前でレッドワイナスの依頼書を手にとった少女が、こちらを向いて頭を下げてきた。

「あー、これはどうもご丁寧に」

思わず、俺も頭を下げてしまった。

「じゃ無くて、君、その依頼受けるの」

危ない、危ない、思わず流されてしまうところだった。

と、思って彼女を見ると、彼女はなぜかご立腹のようだ、

依頼書を持った手を腰にくみ、成長中の胸を一生懸命張って、軽く頭を振って金の軽くウエーブした髪を後ろに流すと。

「君じゃありません、私の名前は、メアリィ・ツヴァインツェルですわ、『蒼の魔道士』殿」

彼女は掲示板の目で立ち尽くす俺達三人に、そう名乗りを上げると得意げな顔をする。

「えーと」

「うん」

「そうだねー」

『だれ？』

三人同時にハモった俺達が、名前に苗字を持っているのが貴族の証

だと気がついたのは。

顔を紅染させたメアリ嬢に俺の顔面がぶん殴られた後のことだった。

あれ？ パーじゃなくてグーだったんだけど。

## 雅なる月のごとく 二幕（後書き）

殴られましたね。

まあ、貴族についてはいずれー

誤字脱字感想意見などありましたら、乾燥か活動報告の方に書き込みお願いいたします。

**雅なる月のごとく 三幕（前書き）**

実は、殴られたクオーツ君

気絶しています。

今回は前半、第三者視点です



## 雅なる月のつとく 三幕

数多くの、学生達がその場所を利用し、小遣い、または試験と、長年利用されてきたラグリオンの冒険者ギルド。

そこでは、いま、掲示板前にある酒場のようになっているスペースに、三人の少年と一人の少女が座り込んでいた。

少年達は、魔法士の証である黒のローブを着た蒼髪のうつろな目をした少年、魔法士の黒いローブに良く似た服、相違点は錬金士の特徴色である金色の糸で胸元に稗の刺繍が入っているローブ、を着た銀髪で目元を隠している少年、栗色の髪を短髪にして、剣士科の特徴でもある茶褐色の革鎧を急所だけ守るようにつけた快活そうな瞳をした少年。

もちろん、クオーツとキール・ガイアのことなのだが、今三人は、金の軽くウェーブした髪の利発そうな少女の前で縮こまっていた。

といっても、周りから見えてそう見えるだけの話であり、実際のところは落ち着き無く視線をふらふらさせているガイア、銀髪に隠した目元はどこか虚空を見つめているキール、虚ろな瞳でテーブルを直で凝視している、または突っ伏しているクオーツ。

まあ、簡単に言えばクオーツは、その右頬を真っ赤に腫らしている原因の元となった、少女の右フックによって意識を刈り取られていた。

そして、そんな三者三様の様子を呈している少年達の前で、その状況を作り出した少女がその瞳を怒りに染めて静かに座っているとい

ったわけだ。

「それで、あなた達は、なぜレッドワイナスの討伐なんてやろうと思ったんですの

Aランクの飛竜種といっても、レッドワイナスはやはり飛竜種です、学生の小遣い稼ぎならやめておきなさい」

ずっと続いていた沈黙に、嫌気が差したのか少女が話し始める。

「とー、いってもなー、キール」

「今の時期に、酔狂で飛竜種の討伐依頼を受けるものはいない」

おろおろと、無表情な親友に話を振る栗毛の少年と、淡々と話す銀髪の錬金士の少年。

「つまり、卒業試験というわけですね

ですが、剣士科はCランク以上の討伐依頼、錬金科は同行採取で作った錬金物の提出、魔法科は応用魔法開発だったと記憶しておりますが」

その言葉に、二人は固まった、目の前の高飛車そうな少女がほかの科の試験内容を把握していることになり驚いたのだ。

「なぜ、それを知っている？」

そんな、キールの質問はあっさり答えが出される。

「友達から聞いただけですわ

それとも、あったばかりの殿方をグーで殴って気絶させてしまうような女には、友の一人もいないと考えていたのですか？」

その言葉に、あっさりと納得して、二人は首を横に振る。

良く考えれば、相手は貴族、友達かどうかはおいとしても取り巻きの一人や二人はいるだろう。

と納得して。

「ああ、そうか、ならクオーツの試験内容を知るわけが無いな」

「そうだねー、アイナ先生のせいで科生がほかに一人もいないからな」

その言葉に、少女は怪訝な表情をする。

「何のことです？格好から『蒼の魔道士』は魔法科の生徒だと思っ  
ていましたか」

あー、殿が無くなっているな。と心の中で考えていた二人。

「あー、まあ普通はそうだな」

「ああ、こいつは少々特殊だからな」

そして、少女は聞くことになる、六年間この不幸な少年の隣にいた二人の親友から、彼におきた喜劇の数々を。

「そ、それでは、一年の終了式の時に教頭先生のカツラを吹き飛ばしたのは彼だったですか！」

「そう、あれが面白がったアイナ先生の最初の進級試験だったんだよー」

「へー、じゃあ、魔物の森を管理しているフェンリルは」

「ああ、そうだ、魔素を取り込みすぎて凶暴化したフェンリルを落ち着かせるため、三日三晩不眠不休で戦い続けたらしい」

「え、摩訶不思議といわれていたライオネルの生態系を」

「ああ、あれはー」

などと、気絶している少年を残して話しは進んでいくのだった。

頬の痛みに引きずられるように、ゆっくりと意識が覚醒していく。

「あら、おきたみたいですね」

「おはよー、クオーツ」

「起きたか、頬は大丈夫か？」

目の前には、俺を気絶させたであろう少女と和やかに談笑する二人の親友の姿があった。

「俺は、どれくらい気絶していたんだ？」

「ん、そうだな五時間くらいか」

「あら、もうそんな時間ですか？」

楽しい、お話をしていると、やっぱり時間が経つのが早いですわね」

楽しいお話し？こいつら、俺が気絶している横で仲良くなってやがったのか、と軽く落ち込む。

まあ、いいか、と気分を切り替えて。

「で、何の話をしていたんだ？」

とりあえず、どんな話をすればこんな気難しそうな女性とこんな、いい雰囲気になれるかが知りたかった。

「クオーツのはなしー」

「アイナ先生の無茶振りだな」

「あなたの、半生記ですわね」

三者三様の答えが返ってきた。

全部、俺関連かよ、流石に俺は自分の黒歴史を話しのネタにする勇氣は無いぞ。

と、というか、人の話で五時間も盛り上がっていたのかよ。

「それで、クオーツ君、私から提案なのですが」

「ああ、目覚めた俺にいきなり提案とは、ずいぶん俺は可哀想な存在にされたようだな」

「ええ、それはもう」

されたかよ、本当に何の話したんだよこいつら。

「ふふ、失礼

それで、クオーツ君、提案というのはですね、一緒にレッドワイナスを討伐に行かないかってことです」

一緒にか、まだ、俺だけは会って間もない状態だからこの少女が、なぜ、そこまで言ってくれるかわから無い。

「すまん、気絶していた俺にとっては、君と会ったのはついさっきのことだ

失礼な質問かも知れないが、そこまで君が譲歩してくれる理由がわからないのだが」

「だから、私の名前はメアリィだと言っているでしょ」

俺の真剣な質問だったのに、なぜか返ってきたのは呼びかたの訂正である。

「おや、今はその君の「メアリイですわ」」

「いやだか「メアリイですわ」」

何だろう、最近の名前で科白をつぶす遊びでもはやっているのだろうか。

泣いてもいいかな？

「わかった、メア「メアリイですわ」」

頼む、勘弁してくれ！

「ふふ、失礼ついあなたの反応が面白かったので

これなら、アイナ先生の気持ちも少しわかるような気がしますわ」

と花の様に笑うメアリイ嬢と、含み笑いを浮かべている左右の男共二人。

帰っていいかな？何かもう布団に包まって羞恥に身を震わせていたい。

「それで、どうですのクオーツ君、この依頼、共同に受けませんか？」

「その前に、ひとつ聞いてもいいか？」

「はい、何でしょうか？」

おれが、ずっと考えていた疑問それは――

「なぜ、君はこの依頼を受けるんだ？」



## 雅なる月のごとく 三幕（後書き）

次回、メアリィ軍団（笑）全員集合

依頼開始です。

依頼編二話の、その後の話を一話書いて多分 外伝 雅なる月のごとく は終わりとなる予定です。

最後までお付き合いください。

## ながき（前書き）

続きと思った方申し訳ありません。

ながきです。

## なかがき

えーと

外伝 雅なる月のごとく が終了して三章に入るに当たって正式に題名を決めたいと思っています。

いままで、通り最強のNPC共でもいいのですが。

何か、候補は無いか、ここまで読んでいただいた読者様がたにおききしたいのですがよろしいでしょうか？

ちなみに、作者が考えているのは

最強のNPC共（決）

聖魔天の双想士

魔王の＞片翼くの聖女

です、これ以外のご意見、または、これがいいんじゃないかなどありましたら。

作者の活動報告、または、感想の方に書き込みをいただきたいのです。

作者の我がままにお付き合いいただけたら幸いです。

## ながき（後書き）

それでは、次回はしっかりと雅四幕をお書きいただきますので。

そこでお会いいたしましょう。

雅なる月のごとく 四幕（前書き）

全員集合、出発です。

## 雅なる月のごとく 四幕

俺が発した疑問。

「その疑問はもっともですわね、私の学科は剣士科、卒業試験はCランク以上の討伐ですから」

にたいして、でも、あなたのような例外もある、と彼女は続ける。  
そう、俺のような例外。

本来なら、人数の多い学科の方が試験は難しくなる、試験と言う名前のふるいに学生達をかけないといけないのだから。

だからこそ、この学園に通う生徒は、人気の無い学科、人の少ない学科、もう、先生の趣味に近い学科を何個か受けたりするのだ。

一人しかいないなら、その生徒をふるいにかける必要も無く、その分野を極めることができるなら、同じ職業でも違う特色を発揮できるかもしれない。

それこそが学部選択における自由の意味である。

つまり、学部選択において、一ヶ月間氷付けで、人気の無い学科しか受けられなかったうえ、その学科の先生の嫌がらせで、卒業試験が危うい生徒なんて俺くらいのもものだ。

本来ならね。

「私が受けている、もひとつの学科は、付加魔法科です

そして、卒業試験は、Aランク以上の討伐依頼でした」

付加魔法科、剣士として受けたい学科ではあるのだが、先生が偏屈なうえ、過去十年間で卒業生が二人しかいないという厳しい学科だった。

「そうか、あの先生ならやりかねないな」

「ああ」

「そうだねー」

俺の相槌に、先まで黙って話を聞いているだけだった二人も会話に加わる。

「でもー、付加魔法科の一番敬遠されるところは六年かけても戦闘で使えるレベルまで習得できないこと、ってきいたけど」

同じ剣士科のガイアの疑問は的を得ているのだろう。彼女は少し顔を曇らす。

「ええ、おかげで私はこの五年間、付加魔法の進級試験は一切ありませんでした」

でも、できるようになったからこそ、この卒業試験なんです」

そして、彼女の笑顔が花開く。

そして、そのときには俺の中でもう結論は出ていた。



「メアリィ嬢、あなたの提案どおり、この依頼ばかりで受けよう」

俺の言葉に、また少し彼女を笑みを強くした。

「それでは、そちら三人追加で、合計七人ですね」

へ、七人？

「えーと、後の三人は何？」

「クオーツ君、私にも、あなた達のように、危険を顧みないでついてきてくれる親友がいるということですよ」

俺の疑問に、彼女はそう答えた。

ところで、いつの間に俺、名前で呼ばれるようになったんだ？

しかし、その疑問ははれることないまま、依頼の日を向かえることとなる。

学園都市ラグリオンの城門前、そこでは、今七人の少年少女達が顔をつき合っていた。

「まずは、皆さんご存知でしょうけど、メアリィ・ツヴァインツェルです、メアリィでいいですよ」

まず、メアリィが先頭を切って自己紹介、

薄手ではあるが、白いアーマープレートを邪魔にならない程度、身に纏い、背中には両刃の大型剣＞ロングバウンド＜を背負っている、良く見ると所々に魔法陣が刻まれているので、この剣は彼女の付加魔法に必要な物のだろう。

そして、いつもどおり輝くような軽くウェーブした金髪を、今日は後ろで纏めている、のが今日の彼女のいでたちであった。

「皆さんよろしく申し上げます、私の名前はマリアです」

そういつて、綺麗なお辞儀をしたのは、従士科の制服に身を包んだ銀髪の少女であった。

ちなみに、従士科の制服は女生徒の場合メイド服なのだが、結構従士科は人気があるため見慣れた制服だったりする。

「こんにちは、ライナスです・・・」

そういつて、マリアのまねをしたのかぎこちないお辞儀をしたのは。蒼い髪を腰どころか膝ウラ辺りまで伸ばした小さい少女、その身の丈より大きい蒼水晶の錫杖をもっているところを見ると、クラスは治癒科＞ヒーラー＜らしい。

まあ、治癒科の白を基調としたローブに胸元に、青い糸で癒しの象徴でもあるシルフェの花が刺繍されている時点で一目瞭然なのだが。

「みんな、よろしくー、ロードです」

嬢性陣の最後は、赤い髪に健康的に日焼けした肌の少女だった。

動きを阻害しないためにか、ほとんど鎧などはつけておらず、軽装のうえから、旅人が着るような厚手のマントを羽織っている。

その背中に、身に余るような長弓＞ロングボウ＜を背負っている、

その旅装のような格好とその背中の中弓を見れば、彼女が狩人科なのがあるだろう。

「どもー、ガイアですー、よろしくですー」

ロードの軽い感じに触発されたのか、続いてガイアが軽い感じで女性陣に挨拶した。

いつもどおりの栗色の短髪に、最低限の革鎧、腰にはロングソードと小型の丸盾をつけている。

ちなみに、ガイアと、メアリーの鎧の胸には剣士科の証である剣と盾が交差したマークが刺繍されている。

「キールだ、よろしく」

そして、いつもどおり無表情なもう一人の親友。

銀の髪で目元を隠して、胸元に金糸で稗のマークを刺繍されている以外は魔道士と同じ黒のローブに、大きな黒いマントを羽織っている。

この黒マント、内側にはたくさんポケットがついているらしく、戦闘に行くときの鍊金士の必須アイテムなんだそうだ。

「よろしく、『蒼の魔道士』ことクオーツだ」

最後を閉めたのはなぜか俺、いつもどおり名乗るときには『蒼の魔道士』とつける。

格好は、何も刺繍されていない黒いローブでは無く、今日は黒いシヤツと黒いズボンのうえから旅用のマント羽織っている。

腰には儀礼用の短剣を二本差し、キールのマントと同じようなつくりになっているマントの内ポケットには葉ビンのようなものが数個くくりつけられている。

「ふむ、それでは自己紹介もすんだようだし、話ならこれからの道中いくらでもできる

まずは、先に進むとしようか」

そして、メアリィの号令で皆歩き出した。

目指すのは歩いて三日ほどの位置、レッドワイナスが根城にしているらしい場所、レグナル山脈である。

城門に向かって歩き出す俺達。

「あしがー、つかれた」

とガイア。

「まだ、城門を出てすらいないよ！」

と驚くロード。

「マリア、お茶にしましょうか？」

と優雅なメアリィ嬢。

「歩きながらですか！」

これは、マリアではなく、俺だ。マリア嬢は歩きながらも淡々とお茶の準備をしている。

女性陣はなれたものなのか、マリアからティーカップを受け取るとおいしそうにのみ始めた。

「ところで、『蒼の魔道士』ってクオーツ君がもしかして、あの笑撃の『教頭の空飛ぶカツラ事件』を演出した本人なのですか」

これが、マリアだ。

「ああ、それはもう忘れさせてくれ」

これに関しては、本当に頼む、忘れさせてくれ。

「おなか、……すいた」

これはライナス嬢だな。

「………そうか、気が会うな」

と、返すキール。

お前ら自由すぎだろ！

こうして、城門を守る騎士科の、苦笑している生徒の前を通り過ぎながら、俺達の卒業試験は始まった。



## 雅なる月のごとく 四幕（後書き）

次回はレッドワイナス戦になる予定です。

一話で終わるかなー？

誤字脱字感想意見などありましたら書き込みのほうお願いいたします。

ながぎの募集はまだ続いておりますので。  
活動報告のほうにでも書き込んでください。

**雅なる月のごとく 五幕（前書き）**

レッドウィナス戦です。

まあ、あくまで外伝なので、戦闘は軽めです。

どっちにしろ戦闘描写は苦手ですけど。



## 雅なる月のごとく 五幕

学園都市ラグリオンから、北に歩いて三日、活火山の集合山であるレグナル山脈が存在する。

その一角、山の中腹を現在、七名の少年少女がゆっくりと油断無く進んでいた。

油断無く、中堅の冒険者でも実践できないその領域をこなしながら、彼らは、その視線の先、レッドワイナスの巣に静かに近づいていく。

そこでは、今現在一頭の赤小竜が寝息をたてている。

「俺が、呪文詠唱を行う、できれば一撃で、それで無くてもダメー  
ジは与えたい」

その身を、旅人が纏うようなマントで固めた彼らの一人、蒼髪の少年がそう言葉を発してから、詠唱体制に入った。

「わかった、私もその後の連撃に備えて、付加魔法の詠唱に入ろう  
と思うんだが、かまわないか？」

蒼髪の少年の言葉に、うなずくと軽くウェーブした金髪を後ろでくくった少女が、続いてそう発言した。

「ああ、大丈夫だ、ガイアはロードはレッドワイナスの監視、キールは結界防御の準備、ライナスは補助頼めるか？」

「ああ」

と、キールと呼ばれた銀髪の少年。

「おーけー」

と、ガイアと呼ばれた栗色の髪を持つ少年

「かまわない」

と、深紅の髪をなびかせる少女。

「・・・・・・・・」

こくり、とうなずく長い蒼髪の少女。

「私は、いかがいたしましょうか、メアリイ様」

と、銀髪のメイド服の少女。

「マリアは、私達の詠唱の護衛を頼む、かまわないなクオーツ」

メアリイと呼ばれた金髪の少女が、そう蒼髪の少年に問いかけた。

「ああ、それじゃあみんな、始めよう」

『おう』

了承の言葉と共に放たれた、開戦の火蓋、その言葉と共に彼らは静かに持ち場についた。

大気の中にあふれる水分、その一つ一つを己とひとつに、自分の意思と共に魔力に練りこんでいく。

一汝は天地と共に

その魔力を、今度は練りこんだ意思のままに形づくる。

一我は汝と共にあろう

その意思を、具現し、実体化させ、とき放つ。

一汝は天地にして我、汝は我にして、すべての始まり成り

それが何かと聞かれれば、『海』だろう、しかし、誰も濡れはしない、それはすべて天に浮いているのだから。

一汝は我、我は汝、ゆえに我の呼びかけに答えよ

そして、その『海』は、俺の意思のまま、形をとる、一匹の竜を狩るために。

一汝の名は、『原初の海』、すべてを包み込む始まりの海成り

そして、すべてが組みあがった。

始まりの、すべてを内包する海が一陣の風になって、宙を翔る。

一展開『原初の海』、始動『エアグライド』

詠唱の終わりを告げる言葉と共に、『原初の海』を内抱した水の槍が、赤小竜に突き刺さった。

それは、目を覚ました。

そして気がつく、己の身が危険にさらされていることに、己に今まで食らったことの無い、殺すための無慈悲な一撃が加えられていることに。

そして、それに続くように、火炎の魔剣を揺らめかせ、こちらに駆けてくる人間がいることに。

正直、驚いた。

『蒼の魔道士』などと大層な名で呼ばれていても、まさかこれほどの水魔法を短時間で詠唱、そして具現させるとは思っていなかった。自分の、付加魔法の方が遅くなってしまうんじゃないかと思ったぐらいだ。

まあ、とりあえず、自分の属性でもある、火の中級魔法「火炎弾」  
＞ファイアーボール＜をすばやく、己の剣に付加させて、走り出す。

ちょうど、レッドワイナスが、水の槍をその身に受けて、のた打ち回っているのが見える。

この一撃で、死んでくれないのはかなりショックだが、今はたたみかけることが先決だと意識を切り替えて、レッドワイナスに切りかかる。

「はぁー！ー！ー！」

気合一線ただ振り下ろすのみの斬撃、それでも私の手に、ひどく鈍いが、間違いなく切りつけた感覚が返ってきた。

「さすがー、やるね」

軽い口調の声が、隣から聞こえてくる。

軽く、視線だけ向けると、栗色の髪の少年が、自分と同じようにレッドワイナスの鱗に剣を突き立てていた。

「二人とも、離れろ」

そして、注意の喚起の言葉共に、私達の前に銀髪の無口な少年が飛び出して来ると、彼が着込んでいるマントの中から色違いの液体が入ったビンを、レッドワイナスの顔面に向けて投げつける。

「ロード、いまだ！」

珍しく、先ほどもからしゃべっているキールの指令、そして、親友の深紅の髪の少女が放ったであろう、神速の矢が二本、ビンをがち割った。

先頭前、いや、この三日間何度も話し合ったからこそ、とっさに私は目をふさぐことができた。

それでも、まぶたの裏を刺し貫くような閃光。

そう、彼が投げた二本の液体は混ざると、強力な閃光を放つものだった。

さすが、錬金士だとしか言えないその威力に少しめまいを覚えながらも、しっかりと目を開けて獲物を凝視する。

そこには、不意を疲れすぎて混乱するレッドワイナスの姿があった。

それを確認して、栗毛の少年と目配せすると、私は一気にたたみかけるために駆けだした。

目の前の、レッドワイナスはよほど混乱しているのか、手を振り回すばかりで、ブレスを吐く余裕も無いらしい。

だからこそ、ここでもっと余裕をなくさせるべきだ。

ならば、狙うのは目だ、それで致命的な一撃を与えることができる。  
でも、急がないといけない、徐々にだが水の槍が刺さった後が回復してきている。

やはり、飛竜種の生命力はとんでもないものらしい。

そう考えながら、弓に矢を二本番えた私の視線の先、そこに銀髪の青年が二本の液体が入ったビンを投げたのが見えた。

「ロード、いまだ！」

まるで、私がそこを狙って弓を番えているのがわかっているかのような科白。

面白い。

そして、私は引き絞った弦をそのいくべき方向に向けてとき放った。

今日は、驚いてばかりだ、さっきのクオーツ君の魔法にしても。

ようやく完成したらしい、メアリィ様の付加魔法にしても。

キール君とロードちゃんのコンビネーション閃光弾にしてもだ。

だからこそ、ここは私も動かないとわすれられちゃうなー。

と、ひとつため息をついてから。

私は、愛用の包丁を引き抜く。

まあ、私が包丁と読んでいるだけで、メアリイ様とロードちゃんには、なぜかそれはどう見ても大鉈だ、といわれたけれどね。

まあ、いいでしょう。

そして、私も銀の髪とヘッドドレスをなびかせて前線で戦う剣士二人に加わるために駆けだしていく。

さてと、今日の晩御飯はトカゲの丸焼きかしら？

お手製閃光弾が炸裂したことを確認して。

すばやく後衛に戻る。

後は、クオーツのサポートで十分おつりが来るだろう。

前衛は、盾とロングソードを持ったガイアと火炎の魔剣と化した大型の愛剣を振るうメアリイ嬢、そして、どこから出したのかわからないがその身の丈ほどもある大鉈を縦横無尽に振るっているマリア嬢。

そして、先ほど自分の閃光弾を見事打ちぬいてみせたロード嬢は、



なおもレッドワイナスの目を狙って矢をいかけ続けている。

正直、うまくいきすぎて怖いくらいだ。

「クオーツ、もう一撃いけそうか？」

だからこそ、最後の一撃になるだろう魔法を唱えようとする親友にしゃべりかける。

「ああ、赤トカゲの氷像をつくってやる」

そして、俺の心配をあっさり打ちぬくように彼は、そう言って笑った。

それは気がついていて、自分の命が今刈り取られようとしていることに。

それは気がついていて、目の前の魔剣の少女一人とっても、その力量は自分をしのぐだろうことを。

そのみを、ロングソードに傷つけられながら、そのみを、魔剣に焼かれながら、そのみを大鉦に捌かれながら。

己の、視力を奪った閃光と共に、飛来した弓が己の目を打ちぬいたことに気がつきながら。

そして、今、己を殺すだろう、圧倒的な魔力を練りこんだ魔法を放とうとする少年を肌を感じながら。

ああ、我は死ぬのだな

そこまで、考えて、赤き小竜は、意識と命をすべて凍りつかせた。

最後に見えたのは、視力を失っていてもわかる、冷たき魔法。

最後に聞こえたのは、冷たき言葉。

『凍る大地』>アイ・アイスマウンテン<

それが、最後に感じた、彼の終わりだった。

「終わったな」

蒼髪の少年がため息をつく。

「案外、あっけなかったなー」

栗毛の少年が軽く呟く。

「疲れましたわ」

金髪を後ろにくくった少女が天を仰ぐ。

「今日の夕飯はどうしましょうか」

銀髪のメイドさんが、目の前の氷像を眺めている。

「もう一頭くらいいいけそうだな、お前達」

深紅の髪の少女が苦笑する。

「まだまだ、改良の余地ありかな」

銀髪の少年が吟味する。

「……………わたし、何もしてない」

そして、最後に銀髪の少女が寂しそうに呟いた。

## 雅なる月のごとく 五幕（後書き）

弱いすって？

いや、でも不意打ちめいたこ殴り氷棺の四連コンボですからね、死ぬんじゃないでしょうか？

誤字脱字感想意見お待ちしております。

一応、次回で 外伝 雅なる月のごとしは終わる予定です。

まあ、こんな作者ですからあくまで予定ですけど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6833y/>

---

最強のNPC共（仮）

2011年12月14日03時56分発行